



TITLE:

# 楊守敬と小島家：古醫籍の蒐集と校刊

AUTHOR(S):

眞柳, 誠

---

CITATION:

眞柳, 誠. 楊守敬と小島家：古醫籍の蒐集と校刊. 東方學報 2008, 83: 157-218

ISSUE DATE:

2008-09-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/88025>

RIGHT:

# 楊守敬と小島家 — 古醫籍の蒐集と校刊 —

眞柳 誠

はじめに

一 『日本訪書志』『日本訪書志補』記載の古醫籍

二 小島家の人物と交友

1 家系

2 小島尙質

3 小島尙眞

4 小島尙綱

5 交友

三 小島家の蔵書

1 中國醫書

2 日本醫書

3 總數

四 楊守敬が日本で入手した古醫籍

1 小島家蔵書の入手

2 小島家本以外の入手

3 蔵書の移動

4 蔵書の實數

五 楊守敬の醫書出版

1 多紀家關聯書の重印

2 『脈經』の校刊

3 『武昌醫館叢書』出版への協力

おわりに

## はじめに

楊守敬（一八三九～一九一五）は清國駐日初代公使・何如璋（一八三八～九一）に召應して明治十三年（光緒六、一八八〇）に來日し、歸國した明治十七年（光緒十、一八八四）までの期間に多くの善本古籍を購入した。それらの搜索と入手に『經籍訪古志』を手がかりとし、本書を編纂した一人、森立之（一八〇七～八五）の仲介を得たことはよく知られている。<sup>(2)(3)</sup> 立之は江戸末期・明治初期を代表する考證醫學派の醫家ゆえ、守敬が入手した醫書は少なくなかった。守敬は二代公使・黎庶昌（一八三七～九八）の委嘱で滯日中に『古逸叢書』を編刊（一八八四）し、歸國後も多くの出版活動を行っている。守敬と立之の交流等は従来から研究が多いが、守敬が幾度か行つた醫書出版の詳細と、小島尙質らの影響は未だ十分に検討されていない。本稿ではその全貌に光を當てたい。

まず導入として、江戸中期から明治維新前後における傳統醫學界の動向を簡単に述べておこう。

江戸中期には、重訂錯簡派と呼ばれる明・方有執『傷寒論條辨』（二五八九成）や清・喻嘉言『傷寒尚論篇』（二六四八成）の影響もあり、吉益東洞（一七〇二～七三）を筆頭とする古方派が興る。彼らは傳統醫學の新たな日本化を促進させた反面、自己の見解により中國醫學古典に批判と改竄を加えていった。江戸後期は清朝考證學の手法が古醫籍研究にも應用され始め、幕府醫官を中心として江戸醫學館に集つた考證醫學派が形成され、古方派の獨善的古典解釋に對する新たな立場を築いていく。

考證醫學派は中日歴代の古典籍を博覽援引し、客觀的・實證的立場から古醫籍を校勘・整備・研究して多くの業績を著している。<sup>(4)(5)</sup> この基礎として善本古醫籍の校刊、さらに亡佚した中國醫書や唐以前古本草の復原等も行われた。當作業のため、彼らの手許には多くの善本と關聯領域の資料が、時には幕府の權力をも行使して蒐集されていた。その書誌研究成果

が多紀元胤（一七八九〜一八二七）の『（中國）醫籍考』八十卷（一八二六成）<sup>(11)</sup>、および森立之・澁江抽齋（一八〇五〜五八）らの『經籍訪古志』八卷（一八五六成）である。このようにして考證醫學派は高度な研究と業績を築き上げ、明治維新直前にはその頂點に達していた。

しかし明治になると矢継ぎ早な西洋醫學一本化政策が實施された。明治元年（一八六八）に西洋醫術採用許可令、同七年（一八七四）に西洋七科を定める新醫制、同十六年（一八八三）には醫術開業試験規則および醫師免證規則が定められた。これに對し漢醫側もさまざまな抵抗運動を行うが、明治二十八年（一八九五）に漢醫提出の醫師免許改正法案が議會で否決され、明治三十五年（一九〇二）には漢醫存續運動がまったく終焉してしまう。<sup>(12)</sup> この結果、日本の傳統醫學研究は基盤と同時に後繼者までほぼ失ってしまった。<sup>(13)</sup>

一方、明治維新による急速な近代化はたちまち清國の注目するところとなり、公使館員や多くの視察者が來日した。<sup>(14)</sup> さらに江戸時代は鎖國政策で長崎でのみ交易していた清國商人が、維新後は神戸・大阪・横濱・東京など日本各地へ商域を廣げている。

以上の経緯により、江戸末期までに空前の水準に達していた傳統醫學の研究業績と膨大な藏書は、後繼者を失ったまま相繼ぐ有力學醫の逝去に伴い、價値を認められることもなく死藏され、あるいは巷間の書肆に流出していった。<sup>(15)</sup> これら古醫籍や研究書のある部分は、當時來日していた博識眼ある清國の學者・商人の注目を集め、以降さまざまな経過をたどり中國に傳入・紹介されていくことになる。<sup>(16)</sup> これを最も大規模かつ早期に行った人物を楊守敬とすることに大きな異論はなからう。<sup>(17)</sup>

一 『日本訪書志』『日本訪書志補』記載の古醫籍

楊守敬は『經籍訪古志』の影響もあって來日中から入手した善本の解題を記しており、それを歸國後に整理し、『日本訪書志』として光緒二十七年（一九〇二）に出版した。本書の序文に續く凡例「日本訪書志緣起」（光緒七記、一八八二）<sup>21</sup> 第一條には、入手した古籍を「……皆購之、不一年遂有三萬餘卷」といい、以下の言葉も記す。

（第一〇條）日本收藏家……澁江道純、小島尙質及森立之、皆儲藏之有名者、余之所得大抵諸家之遺。

（第一一條）日本醫員多博學、藏書亦醫員多。喜多村氏、多紀氏、澁江氏、小島氏、森氏、皆醫員也。故醫籍尤收羅靡遺。

いま臺北故宮博物院に所藏される小島尙質手校の明・經餘居刊『外臺祕要方』（箱號一二六二、觀字號七二八）の守敬題識にも、「小島三世以醫鳴于日本。余得古醫書祕本多出其家」<sup>22</sup>とある。また同院所藏日本傳鈔（小島尙質手校）朝鮮活字本『新刊仁齋直指方論』（箱號六四、觀字號七七五）の守敬題識には、「學古（尙質）爲日本侍醫、藏書之富自多紀外罕有其匹。余所得醫籍、大抵皆其舊藏」<sup>23</sup>とも記される。

つまり彼が日本で入手した古籍は博學な醫家の舊藏書が多く、それゆえ醫籍が完備しており、特に祕本古醫籍は多紀家に次ぐ藏書を誇る小島家三代（尙質・尙眞・尙綱）から大部分を得たというのである。これは『日本訪書志』に記される入手先の書數を、趙飛鵬が調査した以下のデータ<sup>24</sup>と正に合致する。

小島學古（尙質）…一〇部、森立之・狩谷望之…各六部、向山黃村…三部、寺田弘・町田久成・柏木政矩…各二部、丹波（多紀）元堅・後藤正齋・水野忠央・島田藩根・吉田篁墩・新見義卿・柴邦彦…各一部

すなわち『日本訪書志』が入手先を記す計三九部の内、半數近い一七部が考證醫家の小島・森・多紀の各家舊藏書で、

小島家が最大なのである。他方、『日本訪書志』卷九・一〇の醫類で守敬が所藏をいう書の舊藏者を筆者が精査すると、小島學古八部、小島尙質四部、小島春沂・錦小路・多紀・啓迪院・松章煥之各一部だった。趙氏の調査とは合致しないが、小島家舊藏が學古(尙質)一二部・春沂(尙眞)一部と壓倒的多數なのは間違いない。さらに王重民『日本訪書志補』で醫家類に該當する書のうち『日本訪書志』との重複書を除くと、守敬が舊藏者を記す三部は全て小島學古(尙質)の書だった。このように守敬は來日した明治十三年から「不一年遂有三萬餘卷」を購入し、「醫籍尤收羅靡遺」「所得醫籍、大抵皆其(小島家)舊藏」と記す。それは『日本訪書志』『日本訪書志補』が著録する舊藏者の傾向と一致していた。とはいえ彼が歸國の明治十七年までに入手した古醫籍全體の書數や來歴が分かる資料は知られていない。ただし、守敬が幾度も言及する小島家に注目するなら、およそその手がかりが得られる。

## 二 小島家の人物と交友

小島家については森鷗外の史傳小説『小島寶素』(大正六成、一九一七)がある。しかし當書その六に「寶素(尙質)の事蹟は一も傳へられてをらぬ<sup>(26)</sup>」と記すように、鷗外は關聯史料を數年搜索したが見出せなかった。それゆえ尙綱の子・杲一の話や、提供された小島家の先祖書・親類書と尙綱の日記『日新錄』、および武鑾の記述等に基づくしかなかったという。このため當書には先祖からの尙綱までの家系、彼らの名・住所・職位・生没年・墓所などしか記されず、小島家藏書については記述がほとんどない。とはいえ一定の史實は分かるので、筆者らの知見も加えて以下に整理してみる。

# 1 家系

小島家は尙質で幕府醫官八世になる。醫官初代は通稱を圓齋(？)一六五七)といい、小兒の治療に長け、正保末・慶安元年(一六四八)に第三代將軍家光から奥醫師を命じられた。圓齋以下の小島家歴代を、町は『日新録』にも基づき次のように整理する。

二世佑昌(一六二六〜九一、二代圓齋)、三世春庵(一六六八〜一七三八、三代圓齋)、四世豐克(一七〇三〜五七、二代春庵)、五世國親(一七三九〜五九、四代圓齋)、六世春章(一七二八〜七〇、春庵三男・春策)、七世根一(一七四七〜一八〇三)、八世尙質、九世尙眞、十世尙綱、十一世杲一(一八七五〜一九二五)。

尙質・尙眞・尙綱は以下に記すが、幕府醫官は尙綱で終わり、明治以降の十一世杲一は醫業を繼いでいないと思われる。

## 2 小島尙質

尙質(一七九七〜一八四八)は名で、字を學古、通稱を春庵(四代)といい、寶素と號した。早くから江戸醫學館で學び、十五歳(一八一二)で獻藥登城となり、十七歳(一八二三)で醫學館藥調合役、二十一歳(一八一七)で同藥調合役取締、二十五歳(一八二二)で番醫、四十五歳(一八四二)で法眼・右大將(西の丸)奥醫師、五十歳(一八四六)で奥詰醫師・醫學館世話役を任じ、五十二歳(一八四八)で没した。

他方、筆者の臺北故宮博物院所藏古醫籍調査による尙質の識語等から、次のことが分かる。自稱は觀某生・佞宋・佞宋道人・佞宋處士・佞宋學人・圓齋後人・棄疎閑人、藏書印は「江戸小島氏八世醫師」「小島尙質」「與子燈前共讀書」「尙質」「臣尙質」「尙質之印」「醫師/臣尙質/印」「小島質精校醫經」「字/學古」「學/古氏」「學古氏印」「小嶋寶素」「寶素堂」「寶素堂/所藏醫/書之記」「葆素堂/臧驚/人祕箒」「葆素/所藏」「佞宋(鼎型)」「佞宋」「聽/雨」を用い

ている。

自編著では以下の書や文書が現存する。

〔重輯〕新修本草三〇一一・一三・一四・一六卷五册（一八三二年頃尙質ら作、臺北故宮博物院）

〔黃帝內經太素〕對經篇一卷一册（一八四〇年以前尙質筆、臺北故宮博物院）<sup>(29)</sup>

河清寓記三卷一册（一八四二年九月～十月成、一八五三年森立之寫、國立國會圖書館）<sup>(30)</sup>

小島寶素尺牘二九枚（一八四二年九月～十一月尙質筆、多紀元堅・澁江抽齋・伊澤伯軒あて手紙、日本大學醫學部圖書館富士川文庫）

中風閉脫辨一册（一八四六年六月成、醫學館學生答案に多紀元堅・尙質・喜多村直寛が自筆批語、國立公文書館内閣文庫）

傷寒方案一册（一八四六年七月成、醫學館學生答案に多紀元堅・尙質が自筆批語、國立公文書館内閣文庫）

宋重醫藥表一册（一八四七年五月成、尙質筆、尙真一八五〇年識語、臺北故宮博物院）

醫書書目一册（小島寶素藏書目錄）一册（成年未詳、西尾市岩瀬文庫）

皇朝醫略存卷一・一册（成年未詳、尙質筆、武田科學振興財團杏雨書屋）

古刻舊鈔目錄一册（成年未詳、尙質筆、大東急記念文庫）

さらに臺北故宮博物院所藏の小島尙真『座右筆記』は父・尙質の「遺著并手校數種」として以下の二三書を列記する。

- （一）經方權量攷、（二）醫經釋義、（三）經脈古義、（四）瘡疹類要、（五）胎產學要、（六）傷寒雜病論卷次攷、（七）診視要訣、（八）修製法則、（九）太素補遺、（一〇）太素攷證、（一一）宋朝醫事年表、（一二）皇朝醫略、（一三）體療抄、（一四）醫籍目錄、（一五）醫師令條、（一六）醫師心得、（一七）日用良方、（一八）醫籍年表、（一九）感舊錄、（二〇）皇朝醫史、（二一）本草經集注、（二二）新修本草、（二三）經效產寶補證

なお以上の記録には出てこないが、尙質は『留眞譜』數冊を編纂しており、これを二〇餘冊まで補訂したのが楊守敬の



『留眞譜』であることを陳捷が明らかにしている。<sup>(31)</sup>

### 3 小島尙眞

尙眞（一八二九～一八五七）は尙質の三男、尙質の長男・次男は夭逝している。尙眞は名で、幼名を簾三郎、字を抱沖、通稱を春沂といい、檉蔭と號した。十一歳（一八三九）で多紀元堅に入門。また臺北故宮所藏の尙質手校本の識語によると、同年から尙質主宰の『千金翼方』對讀・校勘會に初参加している。十七歳（一八四五）で醫學館素讀吟味役、二十歳（一八四八）で同寄寮頭取、二十一歳（一八四九）で父の病没により小島家を繼いで番醫師、二十五歳（一八五三）で醫學館世話役手傳（助教）、二十六歳（一八五四）で寄合醫師を任じ、二十九歳で沒した。

筆者の臺北故宮所藏古醫籍調査による尙眞識語等からは次のことが分かる。檉蔭生や沂と自稱し、藏書印は「尙眞／之印」「尙眞／校讀」「尙眞／校定」「抱沖氏」「檉蔭／生」「檉蔭」を用いていた。自編著では以下の各書が現存する。

座右筆記一冊（一八四六年起稿、尙眞筆、臺北故宮博物院）

寶素堂藏書目錄二編一冊（一八五二～一八五五年内、森約之一八五九年寫、國立國會圖書館）<sup>(32)</sup>

今定漢五量考一編一冊五葉（一八五四年六月成・八月刊、喜多村直寛活字印本、京都大學附屬圖書館富士川文庫）

皇國醫籍目錄一冊（一八五五年四月十三日成、尙眞筆、國立公文書館内閣文庫）

醫籍彙刻目錄一冊（一八五五年十二月成、尙眞筆、臺北故宮博物院）

明清年代未詳醫書目錄一冊（成年未詳、尙眞筆、東京大學附屬圖書館鵜軒文庫）

醫籍著錄二卷二冊（成年未詳、尙眞筆、臺北故宮博物院）

さらに尙眞『座右筆記』は自著ないし著述豫定らしき書として以下の四書を記す。

(一) 新校正本草經、(二) 避諱攷、(三) 本草地名考、(四) 醫方月令  
また「手校數種」として以下の各書も舉げる。

(五) 補闕肘後百一方新校正、(六) 經方類要、(七) 經驗摘英方三卷一冊(一八四六年脱稿)、(八) 經方叢鈔、(九) 文稿、  
(一〇) 書目四種、(一一) 經驗丸散膏方、(一二) 病名古義、(一三) 諸書記聞、(一四) 視聽雜鈔、(一五) 醫經校勘  
記、(一六) 本草彙言類方、(一七) 皇朝醫籍攷、(一八) 傷寒論注、(一九) 金匱要略注、(二〇) 素問注、(二一) 靈  
樞注、(二二) 難經注、(二三) 醫經釋義、(二四) 經穴古義、(二五) 醫學紺珠、(二六) 醫籍年表、(二七) 醫籍纂詁、  
(二八) 修製古義、(二九) 候脈要訣、(三〇) 群書鈔方、(三一) 治疾方攷證、(三二) 金匱玉函經、(三三) 元和紀用  
經、(三四) 類纂歷代名醫論要

#### 4 小島尙綱

尙綱(一八三九〜八〇)は尙質の四男で、兄・尙眞に子になかったため、その逝去後に尙眞の養子となって家を継いでいる。尙綱は名で、幼名を簾四郎、字を瞻淇、通稱を春澳、子錦と號した。十八歳(一八五六)で醫學館寄宿寮に入り、二十歳(一八五八)で家を継ぎ、二十四歳(一八六二)で同寄宿寮頭取出役、二十九歳(一八六七)同世話役手傳介・試業頭取之ニ掛りとなった。明治維新後は失職し、明治十三年(一八八〇)十二月五日に四十二歳で没している。

臺北故宮所藏の尙綱手校諸本の識語は二十二歳(一八六〇)から見え、三十四歳の明治五年(一八七二)七月二十七日まで続く。これらに見える尙綱の自稱は不肖孤、藏書印は「尙綱／校讀」「尙綱／之印」を用いている。自著は前述の『日新録』一冊(一八五五〜五七年日記、尙綱筆、慶應大學北里記念醫學圖書館富士川文庫)が知られる。<sup>33)</sup>著述が少ないのは幕府醫官を繼いで一二年で明治維新を迎えたことによるう。

ちなみに尙質・尙眞・尙綱は共通して「小島氏／圖書記」「博愛堂記」の藏書印を使用、讀書室を攷古齋・葆素堂・寶素堂・寶素閣・博愛堂と號した。彼らが鈔寫に概ね用いた罫紙は匡郭左下方に「攷古齋鈔本」ないし「寶素堂鈔本」と印刷され、各々に數種がある。

## 5 交友<sup>(34)</sup>

小島尙質・尙眞・尙綱は幕府醫官として江戸醫學館に勤務しており、當然ながら醫學館關係者との交友が最も多い。彼らはいずれも考證醫學に數々の業績を遺し、また藏書家でもあったので、使用した藏書印も記しておく。

### (1) 多紀家

江戸醫學館は幕府醫官の多紀家が歴代主宰し、小島三代の上司だった。多紀氏の姓は丹波、祖先は歸化人で後漢の靈帝の末裔と傳えられるため、時に劉氏を名乗ることもある。尙質が醫學館で師事したのは多紀元簡（安長・桂山・櫟窓、一七五五～一八一〇）で、彼の時代から考證醫學が本格的に始まり、著書も多い。その長男は多紀元胤（安元・柳沂、一七八九～一八二七）で、藏書印は「元胤」を用いた。元胤が若くして没したため、その後を繼いだ元簡の二男、多紀元堅（菫庭・亦柔・三松、一七九六～一八五七）が醫學館を主宰した。藏書印は「丹波元堅」「元堅之印」「菫庭」「樂眞院」「奚暇齋／讀本記」などを用いた。元堅の没後、醫學館は元胤長男（養子）の多紀元听（安良、一八〇五～五七）、元堅長男の多紀元佑（棠邊、一八二五～六三）、元听長男の多紀元琰（雲從、一八二四～七六）が順に繼ぎ、そして幕末を迎えた。

江戸醫學館は藏書室を躋壽館（殿）と號し、「江戸醫學／藏書之記」「醫學／圖書」「醫學提舉」「躋壽殿／書籍記」「躋壽館記」の藏書印を用いた。また多紀本家は藏書室を聿修堂と號して「多紀氏／藏書印」「聿修堂」の藏書印も用いた。

(2) 同僚・友人

小島家と交友のあった主な同僚・友人には、奈須家・伊澤家・澁江家・山田家・喜多村家・森家がある。

奈須恒徳（柳邨・玄盅〔散人〕、一七七四～一八四二）は幕府醫官で、尙質と校讀の研究會を共催することが多かった。恒徳の子・菊庵も幕府醫官で、彼らは「久昌院／藏書」「奈須／恒徳」の藏書印を用いている。恒徳の著作は多い。

伊澤蘭軒（儋甫・信恬・恬・都梁陳人、一七七七～一八二九）は多紀元簡と元堅の中間世代。蘭軒は書を著すと間違ひも必ずあることから著作を好まなかった。蘭軒の長男・榛軒（一八〇四～五二）、二男・柏軒（信重、一八一〇～六三）、榛軒の子・棠軒（一八三四～七五）も含めみな福山藩醫で、「伊澤氏／酌源堂／圖書記」の藏書印を用いた。彼らについては森鷗外の史傳小説『伊澤蘭軒』がある。蘭軒門下には澁江抽齋・山田業廣・森立之がいた。彼らは蘭軒の没後に榛軒・柏軒ともども多紀元堅に師事し、江戸醫學館に集って古醫籍の研究を重ねている。

澁江抽（籀）齋（全善・道純、一八〇五～五八）は弘前藩醫で、藏書印は「弘前醫官澁／江氏藏書記」を用いた。森鷗外の史傳小説『澁江抽齋』がある。

喜多村直寛（栲窓・醉白道人、一八〇四～七六）は幕府醫官で、一八四九年に法眼まで登った。著書は多い。木活字を所有し、自著の他に同僚の書など一七種の私家版を出版した。

山田業廣（椿庭・子勤・昌榮、一八〇八～八二）は高崎藩醫で、著書は多い。その子・山田業精（靜齋、一八五〇～一九〇七）とともに「九折堂山田／氏圖書之記」の藏書印を用いた。

森立之（枳園・養竹四世・養竹、一八〇七～八五）と子の約之（養眞、一八三五～七二）は福山藩醫で、立之には膨大な著書がある。幕末・明治維新の前後に相繼いで上述の考證醫家が没したためもあり、最も長命だった立之が考證醫學を集大成し、その一面を來日した楊守敬に傳えたともいえる。

### 三 小島家の蔵書

#### 1 中國醫書

藏印記や識語等で小島家舊藏と分かる古醫籍は、筆者の管見で日本・臺灣・中國・英國の圖書館等に確認された。尙質・尙眞の自編著も前述の各書が現存する。さらに調査が進めば、恐らく米國・韓國でも關聯書を見出せるだろう。ただし中國では小島家舊藏書が各地に分散し、原本閱覽の困難もあり、それらの悉皆調査はほぼ不可能な状態にある。したがって現在、最も信頼に足る小島家の舊藏書情報は尙眞著録の『寶素堂藏書目錄』に基づくしかない。

當目錄の成立年等は尙眞自筆本が行方不明で分からないが、國會圖書館に安政六年（一八五九）の森約之轉寫本があるので、この年より前になる。他方、尙眞の『座右筆記』は父の遺著として尙質の（二四）「醫籍目錄」を記すが、その現存は管見範囲にない。しかし岩瀬文庫に『醫書書目（小島寶素藏書目錄）』があり、尙質段階でも藏書目錄は作成されていた。そして尙眞が父の藏書目錄を増補整理し、『寶素堂藏書目錄』を編纂したと思われる。ただし當目錄は漢籍しか載せない。寶素堂には日本書もあったので、別に日本書目錄があった可能性もある。ならば『座右筆記』に手校數種として列記する尙眞（二〇）「書目四種」とは、その一つが當目錄、他は寶素堂藏日本書目錄や多紀家聿修堂・福井家崇蘭館などの藏書目錄だったかも知れない。

當目錄は中國醫書の内編と、中國の醫史關聯古典籍と醫書關聯目錄の外編からなる。内編の細目は醫經を黃帝內經・八十一難・藏象脈候・明堂孔穴の四類、經方を張仲景方・傷寒諸方・魏晉梁隋・李唐諸家・趙宋諸家・金元諸家・朱明諸家・清代諸家および婦人產乳・少小嬰兒・痘疹諸方・創瘍諸方・眼目口齒の一三類、本草を神農本草・諸家本草・諸家食經の三類、雜集を論說・養生・運氣の三類に分ける。以上に同一版本等が複數あれば、それも集計して五〇八部が著録さ

れる。また附録「彙刻」として上記各類に分出させた五叢書の所收本、計七八部を叢書毎に列記する。外編は記傳と書目に分け、前者には『史記』扁倉傳など中國醫傳のある八部、後者は中國歷代目錄の醫家類など六部を著録する。すなわち重複記載された附録の五叢書本・七八部を除外すると、當目錄には計五二部について書名・卷冊・刊寫本書誌・著編注者が記される。序文や凡例等はないが、各分類内では成立年代順、同一書では刊寫年代順に排列する史的原則が明瞭に讀み取れる。

なお『座右筆記』には尙質の（一八）「醫籍年表」と尙眞の（二六）「醫籍年表」が記されていたが、ともに現所在は分らない。しかし尙眞自筆の『明清年代未詳醫書目錄』が東大鶚軒文庫にあり、「壬子（一八五二）ノ秋、醫籍年表ヲ撰スル時、明清間年代ノ詳ナラサル醫書ヲ抄出スル稿本ナリ」「從醫籍考錄／出壬子九月」と附記される。つまり尙眞は多紀元胤『醫籍考』に基づき、一八五二年九月に『醫籍年表』と『明清年代未詳醫書目錄』を編纂しており、それらは恐らく尙質「醫籍年表」の修補だったのだろう。こうした中國古醫籍の歴史觀と書誌知識の上で、尙眞は『寶素堂藏書目錄』を編纂している。さらに當目錄附録の「彙刻」を發展させた尙眞『醫籍彙刻』（一八五五年十二月成）が臺北故宮にある。とするなら本目錄の編纂は、一八五二年九月から一八五五年十二月の間だった可能性が高い。

一方、當目錄收載書は中國醫籍の多分野に互っているが、特異な傾向に氣づく。第一は經方各類における書數で、魏晉梁隋一四部・李唐諸家一五部・趙宋諸家五九部・金元諸家四六部・朱明諸家四八部・清代諸家一四部であった。漢籍の傳存數からして魏晉梁隋代と唐代の書が少ないのは當然だが、入手が比較的容易だったはずの清代書が異様に少ない。これは清代の經方書を小島家があまり重視していなかった反映だろう。その反面、傳存の比較的少ない趙宋諸家が五九部と突出している。尙質は藏書に記した識語で、佞宋・佞宋道人・佞宋處士・佞宋學人と自稱し、藏書印も二種の「佞宋」を用していたが、その所以がここにはっきり顯れている。



第二は善本・稀覯本の多さである。宋版三部・元版九部・朝鮮版六部、また室町以前の古鈔本二〇部が著録されていた。醫籍という一分野だけを尙質・尙眞の二代が蒐集し、この数になるのは驚異的といえよう。さらに宋版・元版・朝鮮版の影寫本もほぼ同数あり、仁和寺本『太素』『明堂』『新修本草』という中國亡佚書の影寫本や、亡佚他書の輯佚本も少なくない。むろん現在は善本とされる嘉靖以前の明版も多数ある。本目録から分かる小島家所藏の漢籍醫書は質量ともにきわめて優れ、正に善本の寶庫だったと言っても過言ではなからう。

ところで本目録は五・二部の善本漢籍を載せるが、醫籍以外の外編といえども醫史關聯書だった。しかし彼らの漢籍藏書が醫學關聯しなかった譯ではない。例えば臺北故宮には筆者が見出しただけで小島家舊藏の非醫學漢籍が一六部あり、日本にも現在判明するだけで東京都立中央圖書館に六部、内閣文庫と宮内廳書陵部に各三部、慶應大學斯道文庫に一部の小島家舊藏非醫學漢籍がある。<sup>15)</sup>これらの多くは讀點や他本との校異が隨處に書き入れられており、彼らの單なる藏書ではなかった。また、そうした點も含めて善本性の高い書が多い。一方、蒐書の常識からすると善本だけを所藏することはありません、努力しても半数以上は通常の古籍となってしまう。以上も勘案するなら、小島家には漢籍だけで優に一〇〇〇部以上あった可能性が高い。

## 2 日本醫書

ところで小島家には日本の醫書がどれほどあったのだろうか。『寶素堂藏書目録』に對應すべき「寶素堂藏日本醫書目録」に該當する書は記録も現存も見あたらないので、日本醫書の目録は作成されなかった可能性もある。一方、尙質の「遺著并手校數種」に（一一）「皇朝醫略」と（二〇）「皇朝醫史」があり、前者は杏雨書屋に自筆本が卷一のみ現存する。他方、尙眞の「手校數種」には（一七）「皇朝醫籍攷」が挙げられ、内閣文庫にある尙眞『皇國醫籍目録』と尙眞轉寫『元祿

中侍醫分限記』はその前身と史料らしい。このように日本の醫史や醫籍を研究していた彼らは、相當數の日本醫書を蒐集していたはずである。

さらに尙眞の『皇國醫籍目錄』は「記慶長已前書」と記し、方論・本草・鍼灸・創瘡・婦人・養生・藏象・雜書・口齒・道三著述の細目で計七八部の稀觀書を著録する。しかし「佚」「未見」「見聿修書目」と注記される書も少なくないので、その七八部全てを小島家が所藏していた譯ではない。とはいえ臺北故宮藏書で彼らの舊藏と分かる日本醫書は自著五部を含めて三五部あり、自著以外の相當數は『皇國醫籍目錄』著録書と合致する。

この『皇國醫籍目錄』は著録を慶長以前の稀觀書に限定し、臺北故宮の小島舊藏日本醫書も多くが平安時代〜慶長年間<sup>(36)</sup>の書だった。ただし彼らが江戸期全般に亙る日本醫書を少なからず所藏していたことは、臺北故宮以外の藏書から容易に推測できる。一方、臺北故宮には彼らの舊藏書が漢籍で醫學關聯の一四部を含めて計一四七部、日本醫書が三五部あった。當數量および『寶素堂藏書目錄』に著録の醫學關聯漢籍が五二二部あったことから單純に比例計算（一四七÷三五＝五・三二…X）すると、小島家には稀觀本を含めた日本の醫書等が約一二四部あったことになる。

しかし日本書の蒐集も漢籍と同様で、稀觀本や醫學關聯書だけということは常識的にありえない。ならば大雜把に見積もって、小島家には醫書も加えて最低三〇〇部ほどの日本書があったと推測してもいいのではなからうか。

### 3 總數

以上の推定計算に基づく、小島家は中國と日本の醫學關聯古籍を少なくとも六四六部は所藏していただろう。さらに臺北故宮には、以上に集計されない朝鮮醫書の日本寫本がある。<sup>(37)</sup>こうした諸要素も勘案するなら上述の六四六部は善本醫書の數と言ってよく、通常古籍を含めるなら小島家には概ね一〇〇〇部以上の漢籍、最低三〇〇部ほどの日本書があっ



ただろう。江戸醫學館の『躋壽館醫籍備考』(一八七七)には一三九〇部の醫書が著録されるので、<sup>(38)</sup>醫書以外も含めた小島家藏書を一三〇〇部程度と推測しても實際と大きな乖離はないと思われる。なお筆者が用いる「部」とは書籍としての一書を数えており、一書は一卷の場合もあるが、四〇巻の場合もある。すると當一三〇〇部を巻數に換算するなら、數千巻以上は確實で、あるいは五千巻近くになるかも知れない。

現在、漢籍善本醫書の所藏で世界有數といっている日本の國立公文書館内閣文庫には、清以前の漢籍醫書が一六三二部あり、それらは概ね江戸醫學館・紅葉山文庫・昌平坂學問所・毛利高標の四舊藏書からなり、その舊藏書だけで全體の九四・一五三四部を占める。<sup>(39)</sup>この數字からしても、小島家藏書の規模が如何ほどであつたか十分に理解されよう。

#### 四 楊守敬が日本で入手した古醫籍

##### 1 小島家藏書の入手

楊守敬は明治十三年四月に四十二歳で來日した。<sup>(40)</sup>そして前述のように「不一年遂有三萬餘卷」を購入し、「醫籍尤收羅靡遺」「餘得古醫書祕本多出其(小島)家」「所得醫籍大抵皆其(小島家)舊藏」と記している。この言に偽りがないことも前述した。なぜ彼は小島家三代が家藏目錄まで編纂して誇った祕本藏書を、かくも多數取得できたのだろうか。いくつかの要因が考えられる。

小島家三代の最後・尙綱は幕末の慶應三年(一八六七)、二十九歳で江戸醫學館世話役等に就任していた。當時の尙綱は祿高が一五〇俵と三〇人扶持だった。<sup>(41)</sup>やや若い幕府醫官ではあるものの、これは相當に高い年收だったと推計される。<sup>(42)</sup>しかし明治維新後は失職し、前述のように三十四歳の明治五年(一八七二)まで校勘研究を續けていたが、その後を伝える記録

は見あたらない。そして四十二歳の明治十三年（一八八〇）十二月五日、三十八歳の妻・定と六歳の息子・杲一を遺して没した。この年の四月に同年齡の楊守敬が來日していたことは、正に奇偶といっている。

ところで守敬は『日本訪書志』の外臺祕要方條に「余因（森）立之言、先購小島學古（尙質）校本」と記している。しかし立之が守敬に尙質校本『外臺祕要方』の購入をいつ勧めたのかは記されず、兩者の筆談録『清客筆話』全一一冊にも記録がない。『清客筆話』は明治十四年（一八八一）一月二十一日から始まり、そこに守敬の名刺も貼られているので、この日（45）が立之に會った最初と思われる。したがって立之が小島家の藏書を紹介したのも、この時以降になろう。當時は尙綱の没後間もなく、立之は尙綱の逝去を知った上で紹介しているのも間違いない。明治十四年一月は松方財政の直前で、米價が維新後のピークまで高騰し、同年一〜四月の深川米價は一石で約一二圓にまで達していた。（46）尙綱が祿を失って一三年、さらに尙綱も没した後の妻・定は相當の貧困に窮しただろう。さらに守敬が前年四月に來日し、「不一年」に「三萬餘卷」を入手したと豪語するのを信用するなら、その中に筆者が推測した小島家藏書の數千卷〜五千卷が含まれる蓋然性は高い。つまり守敬は明治十四年一月二十一日に立之と知り合って間もなく、主人を失った小島家の膨大な善本藏書が存在に氣づき、同年三月までにそれを購入したものと思われる。

ただし楊守敬が小島家の全藏書を購入した譯でもないのは、前述した尙綱の日記『日新錄』など尙質・尙眞・尙綱の自筆著作、また彼らが校異などを書き入れた古典籍が一部分ながら日本に現存することから分かる。前者は尙綱の妻が手放さず、また守敬にも入手價値がなかった書だろう。後者は守敬が不要と認めたか、尙綱までの段階で別人に貸し出していたか譲渡した書と思われる。

なお守敬は小島家の藏書を一々手に取り、要不要と購入價格を吟味したらしい。彼が入手した小島家舊藏書を臺北故宮本で見ると、その表紙にしばしば購入價格と思われる「幾兩」「幾匁」を守敬が墨書しているからである。（47）この墨書は概ね

一冊が一兩ないし一匁になるので、どうも彼は兩と匁の文字を區別していない。すると守敬の匁字は兩字の草體で、價格ならば當時の日本はすでに圓單位だったが、清では一兩銀貨が使用されている。ゆえに彼は自分で考えやすい清の價格で記した。その價值判斷や藏書の全體を掌握するには、尙眞編の『寶素堂藏書目錄』がきわめて有用だったはずである。守敬が後で他の藏書を搜索したり、古書店で購入したり、彼が『日本訪書志』を著述する際にも、當目錄および尙眞の『醫籍著錄』は『經籍訪古志』と同様に有用だろう。それゆえ尙眞自筆『寶素堂藏書目錄』の現存は不明だが、守敬が小島家藏書と一緒に入手したものと思われる。

## 2 小島家本以外の入手

楊守敬が日本で入手した古醫籍は小島家藏書に限らない。それらは『日本訪書志』や『日本訪書志補』の記載でも分かるように、各家の舊藏書に互っていた。しかし兩書の記載は守敬藏書の一部に過ぎず、全體を網羅するものではない。彼は歸國後から藏書の一部を賣卻・交換・讓渡しており、それらは移動を繰り返した。例えば民國二十二年（一九三三）に南京に創設された國立中央圖書館が當時蒐集し、現在は國家圖書館〔臺北〕に收藏される古典籍には、彼の舊藏醫書が九部ある。<sup>(48)</sup> また宣統元年（一九〇九）に北京に開設された京師圖書館を繼ぎ、民國十八年（一九二九）に改稱された國立北平圖書館の舊藏書は一九六八年に臺北故宮に一括移管され、その舊北平圖書館本にも守敬舊藏醫書が一部ある。中には日本に再び戻って來た書、例えば守敬手批本『經籍訪古志』<sup>(49)</sup>（靜嘉堂文庫藏）や、いま國寶に指定されている所謂北齊人書卷子本『春秋左氏傳』<sup>(50)</sup>（藤井有隣館藏）まである。

しかしながら後述のごとく守敬藏書の大多數は彼の没後、民國政府が購入した結果、現在ほとんどが臺北故宮博物院圖書文獻館と中國國家圖書館〔北京〕に分藏されている。したがって兩館藏書を悉皆調査するなら、藏印記等で彼が日本で

何處から古醫籍を入手したかが概ね明らかにできる。臺北故宮博物院藏の舊北平圖書館本を含む醫藥關聯古典籍は、『四庫全書』本を除いて筆者が悉皆調査を終え、前述のごとく報告も完了した。中國國家圖書館本はいくつかの困難があり、現時点で五三部しか調査が進んでいない。とはいえ臺北故宮博物院本には後述のように民國政府の購入した半数以上があるので、守敬本全體の傾向は十分に反映していると言えよう。

臺北故宮の守敬舊藏古醫籍にある日本人藏印記および日本人識語等の書き入れから、以下の明瞭な傾向が分かる。舊藏者の第一は當然ながら小島家、第二は江戸醫學館および多紀家、第三は小島家關係者（奈須家・森家・澁江家・伊澤家・山田家・小島家弟子）、第四はその他だった。小島家本は尙質手澤本が第一で、尙眞手澤本が第二、尙綱手澤本が第三だった。前述のように守敬は「日本收藏家……澁江道純、小島尙質及森立之、皆儲藏之有名者、余之所得大抵諸家之遺」（小島）學古（尙質）爲日本侍醫、藏書之富自多紀外罕有其匹。余所得醫籍大抵皆其舊藏」と記していたが、筆者の調査結果と大略合致する。

しかし楊守敬の蒐書指南を行い、時には自己の藏書を賣った森立之の舊藏書が意外に少ない。これについては『清客筆話』所收の筆談に、守敬が立之の藏書を購入したいと執拗に訴えても、固く拒絶する場面がいくつかある。代わりに別の藏書を紹介することがある。さらに『澁江抽齋』（その七十）で森鷗外は、抽齋の藏書が三萬五千部あったが、抽齋没後の萬延元年（一八六〇）には一萬部（この「部」とは冊數のことだろう）に満たなかったといい、立之とその子・約之に貸した書は多く還らなかつたと指摘する。また前述の尙質編『留眞譜』も守敬は立之から入手していた。他方、立之の自著の一部が海外にあるものの、大多數が日本に残っている。以上から推測すると、立之は自著や自藏書の一部だけを意圖的に守敬に賣却していた。そして多くは別藏書を紹介するか、故人となった友人から借用していた書を賣つたらしい。その結果、守敬が入手した古醫籍の舊藏者は臺北故宮に見られる傾向になったと考えられる。

一方、守敬本古醫籍各書にある藏印記からは舊藏者のみならず、一部の書は捺印位置や識語等の書き入れから當該書の移動も推定できる。その概略を以下に示そう。

- ① 小島家↓楊守敬
- ② 啓迪院（岡本玄治家）↓奈須家↓小島家↓楊守敬
- ③ 養安院（曲直瀬）↓久志本家↓小島家↓澁江家↓森立之↓楊守敬
- ④ 伊澤家↓小島家・澁江家↓森立之↓楊守敬
- ⑤ 野間家↓森立之↓楊守敬
- ⑥ 森立之↓楊守敬
- ⑦ 多紀家↓楊守敬
- ⑧ 伊澤家・多紀家・小島家↓山田家↓楊守敬
- ⑨ 武田文庫↓澁江抽齋↓多紀家↓寺田望南↓楊守敬
- ⑩ 小島尙質↓村田章↓小島家↓杉垣篁↓楊守敬
- ⑪ 啓迪院（岡本玄治家）・養安院（曲直瀬）↓杉垣篁↓楊守敬
- ⑫ 東京古書店↓楊守敬

以上は明瞭に推定できた例を統合した結果に過ぎないが、古醫籍は相當に複雑な移動を重ねていたことが理解されよう。さらに守敬が入手する直前の所藏者に注目するなら、彼が誰から購入したかが分かる。①②は小島家から直接入手した書に間違いなく、それに立之の紹介があっただろうことは既に指摘した。③～⑥は立之からの入手で、その内の③～⑤までが鷗外の指摘等に基づく筆者の推定を裏付ける。⑦は多紀家から直接入手したことになるが、その間には立之の介在

が疑われる。他に守敬は古書店でも数多く古籍を購入したと各處に記しており、中には⑫のように古醫籍もあった。それは臺北故宮所藏『傷寒論正義』（箱號六一、觀字號六四八）に「日本橋通四丁目十番地／和漢書籍賣買所／東京 松田幸助」の陽刻印を捺す領收書が挟まれることから分かる。また蒐書家ないし古書店かと思われる⑩⑪の杉垣蓂や、『清客筆話』にも名が見える蒐書家の⑨寺田望南からも入手していた。

このように守敬が入手した古醫籍で舊藏者が分かる書は、①から⑧までが江戸醫學館の関係者だった。そして杉垣蓂以外の全員が立之の知人だったことは、守敬の古醫籍蒐書にはたした立之の大きな役割をはっきり示している。なお以上の醫學館關係者に守敬とも面識のあった淺田宗伯（一八一五～九四）の名がないのは當時、宗伯が大正天皇の出生以來の筆頭侍醫<sup>(52)</sup>で、生活に困窮していかなかったからと理解できる。他方、守敬は「日本訪書志緣起」で「日本醫員多博學、藏書亦醫員多。喜多村氏、多紀氏、澁江氏、小島氏、森氏、皆醫員也」と、藏書の多い醫官の筆頭に喜多村直寛家を記す。直寛と小島家・山田家に親交があったことは、兩家自筆稿本等に見える直寛の書き入れなどから分かる。直寛の編著や刊行書は臺北故宮・中國國家圖書館に少なくないが、それにもかかわらず直寛の舊藏書は一部もない。直寛が没した明治九年（一八七六）後に守敬は來日したのだが、その藏書を入手できていなかったことになる。ただし直寛舊藏書は日本の圖書館や各種文庫にも見えないので、現在まで外部に出ていないらしい。

ところで小島家には中國と日本の善本古醫籍が少なくとも六四六部あっただろうと推定されたが、その大多數は①の經緯で守敬が入手したはずである。臺北故宮では小島家舊藏醫書と分かる①②③⑩が一六九部あり、楊守敬舊藏醫書四五一部の約三七％を占めていた。これから單純に比例計算（二六九・四五二＝六四六・X）すると、守敬が日本で購入した醫學關聯古籍數は一七二四部となり、卷數にすると五千卷は越えるだろう。内閣文庫の藏書に匹敵するこうした大量の古醫籍が日本を離れ、守敬と共に中國を移動することになったのである。



## 3 藏書の移動

楊守敬は四年滯日の後、明治十七年（光緒十、一八八四）五月二十九日に横濱から東京號に乗船して上海に向けて出港した。これに同船していたのが守敬の滯日中から親交のあった儒者の岡千仞（鹿門、一八三三～一九一四）で、二人は六月三十日まで上海・蘇州と一緒に旅している。その様子は千仞の旅行日記『觀光紀游』<sup>53</sup>に詳しい。守敬は五月三十一日に停泊した神戸から千仞と汽車で大坂に赴き、心齋橋の書店でさらに宋版『尚書』まで五〇元（日本圓か）で購入している。のち上海に向かう船中の六月四日、二人の筆談で守敬は「余……購得隋唐逸書百餘筐」と記す。中國で失われていた隋唐書だけで百餘筐とは著しい誇張だが、彼が日本で入手した古籍等を百餘箱に梱包して歸國したことは分かる。それがどの程度の部数や巻数になるかは分からない。しかし彼が來日一年で入手したという三萬巻以上は間違いないだろう。むろん書籍以外に後述する多紀氏『聿修堂醫學叢書』の版木、また守敬が日本で刻版を開始して三冊分まで完成した『留眞譜』の版木もあったはずである。

六月六日午後には上海に着岸した千仞は、共に幕府の昌平黌で學んだ岸田吟香（一八三三～一九〇五）に出迎えられた。日中に跨る多彩な活動を行った吟香は、横濱に來ていたアメリカ人ヘボン（James Curtis Hepburn、一八一五～一九一一）が編纂の『和英語林集成』を同治五年（慶應二、一八六六）に上海で西洋式活字印刷する際、校正等の協力で約一年上海に滞在した。またヘボンから眼藥「精錡水」を學び、慶應三年（一八六七）から製造・販賣し、明治八年（一八七五）には銀座に樂善堂藥舗を開設した。<sup>54</sup>同治七年（慶應四、一八六八）に上海へ再度渡って精錡水の取次所を置き、光緒四年（一八七八）からはそこで書籍も販賣している。光緒六年（明治十三、一八八〇）の再々々渡では上海に樂善堂支店を開き、まだ二十歳の李盛鐸（一八五九～一九三四）とも知りあっている。<sup>55</sup>こうした過程で吟香は日本傳存古籍の大規模販賣も思いつき、千仞や守敬が來た光緒十年には、日本からの輸入古籍や和刻版木で印刷した古籍を賣り出す『樂善堂書目』の初版を上海で出版していた。<sup>56</sup>

吟香はこれらの活動もあり、守敬・千仞が来る前年の光緒九年（一八八三）十一月から五回目の渡清で上海に来ていたため、千仞を出迎えたのである。吟香は清國公使館員とも早くから深交しており、これ以前に守敬と面識があったのは間違いない。そして日本から大量の古籍善本を持ち歸って來た守敬は、吟香の『樂善堂書目』を用いた販書方法にも何らかの示唆を受けたものと想像される。

千仞と守敬は六月二十一日に上海を離れて蘇州に向かった。同地で二人は清末大儒の俞樾（曲園、一八二一～一九〇七）を二十四日に訪問している。俞樾は吟香の依頼で日本人漢詩集『東瀛詩選』四四卷（一八八三刊）を編集し、それに千仞の詩が収録されていたためもあるだろう。このとき俞樾が日本の大家を問うと、守敬が「狩屋腋（谷掖）齋爲第一。曰森養竹（立之）傳其學、爲古今名家」と答えたとき千仞は『觀光紀游』に記す。しかし千仞は「腋（掖）齋爲第一可也。至舉養竹、阿所好、亦甚矣」とコメントするので、立之を「爲古今名家」とする守敬の表現によほど不満だったらしい。翌二十五日は雨で舟游が中止になると守敬は「雜陳在東（日本）所獲古寫經、把玩不置」の體で、二十六日の夜宴も「楊君每談日東（日本）一事、滿座闐然」だったと記される。六月三十日、守敬は母の看病と教諭の任に就くため武漢に近い黃岡（湖北）に向かい、さらに杭州に旅を續ける千仞と別れた。

以下の経緯は吳と陳の報告<sup>(57)</sup>に基づく。こうして楊守敬は歸國した光緒十年、四十六歳で故郷の宜都にも近い黃岡で教諭となり、そこに「鄰蘇園」を光緒十四年（一八八八）に建てて藏書を收めた。守敬は五十三歳の光緒十七年（一八九一）に黃州府儒學教授に轉じ、六十一歳の光緒二十五年（一八九九）に湖廣總督の張之洞（一八三七～一九〇九）の招聘を受け、藏書とともに武昌に移って兩湖書院教習を任じる。六十四歳の光緒二十七年（一九〇二）に武昌の勤成學堂總教長に轉任し、六十五歳の光緒二十九年（一九〇三）には武昌の菊灣に藏書樓「觀海堂」を設置した。七十歳の光緒三十四年（一九〇八）に總教長職を辭したが、武昌に居住を續ける。しかし七十三歳の宣統三年（一九一一）八月十九日（新曆十月十日）に武昌でしま



た辛亥革命により、守敬は自宅に侵入した兵士に銃で脅されたため、藏書等の一部は家僕數人に保管を托し、二十一日に上海へ船で逃避した。上海では舊友の甘翰臣（作蕃）の世話で虹口に寓居する。

上海の避難生活中、守敬は息子を武昌に派遣して必要な藏書等を持ち歸ろうとしたが、戦火のため不可能だった。この間、武昌城内の自宅は軍政府が封印して藏書の大半は問題なかったが、家僕に托した藏書は二五%ないし五〇%が失われたという。さらに城外の別荘にあった醫書ほかの版本も紛失している。當年の十一月に中華民國が成立し、七四歳の翌民國元年（一九一二）、ようやく残った全藏書等を上海に運ぶことができた。當時點で「所剩者、書數十萬卷、書板數千塊而已」と守敬は書信に記す。七十六歳の民國三年（一九一四）、袁世凱總統と黎元洪副總統の招請で參政院參政に就き、北京の西城南魏兒胡同に轉居した。この時の藏書運搬費用は政府から支出されている。しかし七十七歳の民國四年（一九一五）一月九日（新曆）の夜間、小便に出て寢室に戻り突然、中風で卒した。恐らく腦卒中だろう。

守敬の没後、彼の藏書は七萬餘元（三萬五千元とも）で民國政府に購入された。その五〇～六〇%（浩瀚な『大藏經』を含む數量）は、民國七年（一九一八）十一月到北京に開設された松坡圖書館第一館（初代館長・梁啓超（一八七三～一九二九））に同年、徐世昌總統の命で分與される。この他は集靈園に保管され、民國十五年（二八二六）一月到北京の故宮博物院へ移管された。故宮博物院の全藏書は民國政府に従って上海・南京・重慶と移動し、民國三十八年（一九四九）には臺灣へ渡り、一九六八年より臺北の故宮博物館に收藏されるに至っている。他方、松坡圖書館の藏書は、北京圖書館（一九〇九年開設の京師圖書館、一九二九年改稱の北平圖書館の建物を繼承）の開設時（一九四九）に寄贈された。北京圖書館は一九八八年に中國國家圖書館と改稱し、古典籍は新館の善本古籍部と舊館（舊北平圖書館）の普通古籍部に分藏され、雙方に楊守敬舊藏書が見られる。

なお筆者は中國國家圖書館所藏古醫籍の調査を完結していないが、完結した臺北故宮本との比較で守敬舊藏書について次のような印象を感じている。すなわち臺北故宮本は全般に善本性が高く、また數量も中國國家圖書館より多いと思われる。

る。例えば臺北故宮の『黃帝內經太素』存一卷一冊（箱號五〇三、故觀號〇三三一五）は前述した小島尙質自筆・著の『黃帝內經太素』對經篇』のことで、これは中國國家圖書館新館の小島尙眞識語『對經篇并續錄』（編號三二〇五）の前身にあたる。このようにほぼ同一内容の書が二部あった場合、やや善本性の低い書が松坡圖書館に分與された可能性がある。あるいは文獻學研究に高い價值のある小島尙眞編『醫籍著錄』は、自筆本が臺北故宮（箱號四六八）にあり、その藏印記まできわめて精緻に模寫した近代寫本が中國國家圖書館普通古籍部（編號九九四〇四）にある。後者は難讀な草體日本文まで正確に日本楮紙に模寫する等の特徴から、明らかに二十世紀以降に日本人専門家が筆寫している。しかし他の裝幀・製本等は民國時代の中國式で、日本での裝幀を改裝した痕跡もない。つまり北京で日本人専門家に模寫させて製本しており、それが可能だったのは臺北故宮本が北京にあった時代の松坡圖書館だろう。『醫籍著錄』が集靈園ないし北京故宮博物院だけにあったため、その價值を認めた松坡圖書館が模寫したらしい。こうした箇々の事例から類推すると、守敬舊藏古籍のうち『大藏經』を含む部數の五〇（六〇）%が松坡圖書館に分與されたものの、主要書ないし善本書の多くは集靈園に遺す方鍼だった可能性がある。その當否は今後の研究に委ねたい。

#### 4 藏書の實數

以上のごとく、守敬は來日一年内で三萬餘卷の古籍を購入したと記し、歸國時には百餘箱に収める量になっていた。その後も少し増加した可能性があり、戰亂で一部を失った後の民國元年、まだ數十萬卷を上海で所藏していたという。なお守敬自身は『鄰蘇園藏書目』や『觀海堂書目』を編纂しているが不完全で、藏書の全貌を示すものではない。最も網羅しているのは民國二十一年（一九三二）の何澄一編『故宮所藏觀海堂書目』で、趙飛鵬の集計<sup>61</sup>によると經部四五部・史部五六〇部・子部一三七二部・集部五三七部の計二九二四部に及び、子部の醫家類だけで五一二部・約二四〇〇冊が著錄され

る。醫家類の部數・冊數から單純に推計すると、一九三二年段階の北京故宮にあった二九二四部は一三七〇六冊に換算される。それが集靈園に保管された觀海堂藏書の四〇%だったとするなら、民國政府が購入した觀海堂全體には七三一〇部三四二六六冊に近い古典籍があったことになる。なお古籍は一般に、一卷一冊本から八卷一冊本程度まで装幀に相違がある。そこで、推測される平均値の範圍で最大と思われる三卷一冊で計算しても、三四二六六冊は一〇二七九八卷にしかならない。實際は十萬卷以下だろう。この數は守敬が民國元年に上海で所藏していたという數十萬卷とは乖離が大き過ぎる。守敬藏書はそれ以降、民國政府が購入するまでに一部が知人らに譲渡されているが、それが數萬冊や十萬卷ならば、當然何かの記録に遺る。そうした巨大な流出の記録もないので、やはり數十萬卷は誇張された表現と考えるしかないだろう。

一方、現臺北故宮の藏書目録は守敬舊藏の注記がなくて集計できないため、一五九三部、一六七一部一五九一九冊、一五五〇〇冊、一六六六部、一五四九一冊との諸説があるが、概ね一六〇〇部一五五〇〇冊前後と見ていいだろう。醫家類だけなら筆者の調査で四五一部<sup>(82)</sup>の守敬舊藏書があった。すると部數は一九三二年段階の二九二四部から現在の約一六〇〇部（醫家類だけなら五二部から四五一部）まで減少したが、冊數は推計された一三七〇六冊から現在の一五五〇〇冊前後に増加したことになる。部數の減少は、一九三二年段階で別書として著録された數部が、實は一書の分散だったことが後で判明し、一括して一部とされた要因も少しはあるだろう。冊數増加の理由は分からない。

ところで今の中國國家圖書館に伝えられる守敬舊藏書も、同館目録に注記がないため集計できない。そこで筆者が同館の善本古籍と普通古籍の醫家類につき全カードを調査したところ、守敬舊藏の可能性がある書は最大で三〇〇部程度だったが、實際は二〇〇部に満たないだろうと思われた。そして臺北故宮藏書の醫家類で楊守敬本は四五一部だったので、やはり中國國家圖書館より相當に多い。ともあれ守敬没後に民國政府が購入した觀海堂の古典籍は、最大で七三一〇部・三

四二六六冊・一〇二七九八卷と推計され、民國政府が購入した七萬餘元ないし三萬五千元という価格は、その部数ないし冊数からの算出かとも疑われる。

なお中國各地の圖書館等にも楊守敬舊藏書の現存が報告されており、筆者も一九九六年八月三十日に重慶市圖書館古籍部で數書を實見したことがある。その一つは『增修互注禮部韻略』五卷八冊（編號三二／六）で、守敬自筆の丙戌年（光緒十二、一八八六）識語があり、當書は五山版かつ小島尙質舊藏といい、李盛鐸に讓渡する旨が記されていた。このように守敬が日本で入手した古典籍の半數前後は、中國國家圖書館を中心に大陸各地に散在している。その全貌を掌握するのは現段階では不可能に近く、今後の進展に期待したい。

## 五 楊守敬の醫書出版

楊守敬は『古逸叢書』『日本訪書志』『留眞譜』以外にも少なからぬ自著や古典籍を編刊した。<sup>(63)</sup> 吳と趙はその一覽を作成しているが、醫藥書は『大觀本草』一點を舉げるにすぎない。<sup>(65)</sup> 陳はさらに『本草衍義』『傷寒論』『景宋本脈經』等の刊行に守敬の關與を指摘する。守敬は他にも古醫籍の出版に介在し、また計畫したことが少なからずあったが、醫書出版の背景や動機については十分に明らかにされていない。そこで以下、彼の醫書出版活動の詳細を箇々に検討してみよう。

### 1 多紀家關聯書の重印

楊守敬は光緒十年（一八八四）六月に歸國し、六月三十日に蘇州で岡千仞と別れた後、教諭の職に就くため黃岡に向かった。七月には着任したことだろう。その翌月には、多紀父子等の著作一三部全七〇卷を『聿修堂醫學叢書』（圖1）と名づ

け、日本で購入した版木を用いて重印している。當叢書には以下の各書が収められた。(一)内には各書の日本初版年を記す。

多紀元簡著作…『脈學輯要』三卷(寛政七、一七九五)、『救急選方』二卷(享和元、一八〇一)、『醫賸』三卷附一卷(文化六、一八〇九)、『金匱玉函要略輯義』六卷(文化八、一八一二)、『傷寒論輯義』七卷(文政五、一八三二)、『素問識』八卷(天保八、一八三七)

多紀元胤著作…『難經疏證』二卷(文政五、一八三二)

多紀元堅著作…『傷寒廣要』一二卷(文政十、一八二七)、『傷寒論述義』

五卷(天保九、一八三八)、『藥治通義』一二卷(天保十、一八三九)、『金

匱玉函要略述義』三卷(嘉永七、一八五四)

その他の著作…丹波雅忠『醫略抄』一卷(寛政七、一七九五)、小坂元祐

『經穴纂要』五卷(文化七序、一八一〇)

當叢書について守敬は「聿修堂醫學叢書序」<sup>(6)</sup>にこう記す。

……余初遊日本、訪求古書、於醫方尤夥。久之、始知有多紀父子兄弟  
提唱醫學、爲東瀛泰斗。所撰聿修堂諸書、浩博無津涯。……竊意自元  
以來、診察之士、罕有其匹。

彼は日本で古書とりわけ醫方書を夥しく入手したことに觸れ、それで  
知った多紀父子の醫學・著述を絶大に評價する。さらに續け、彼ら著作の  
版木入手と當重印の経緯、多紀父子の別著も紹介する。



圖 1 『聿修堂醫學叢書』(內蒙古圖書館藏、上海中醫書局鉛印本、1935 年)

會有以原板求售者、乃傾囊購歸。其櫟窗（多紀元簡）所撰靈樞識六卷、莖庭（多紀元堅）所撰雜病廣要四十卷、原以活字印行、故無存板、而以醫略抄、經穴纂要附焉。櫟窗別有……。柳沂（多紀元胤）別有……。莖庭別有……。三書皆以卷帙浩繁未刊。柳沂又有……等書。皆少作、亦精核有家法。竝書之以告精于斯術者。光緒甲申秋八月初吉宜都楊守敬記於黃岡學舍

つまり多紀元簡『靈樞識』六卷と多紀元堅『雜病廣要』四〇卷は活字印刷で版木がなかったため、版木のあった『醫略抄』と『經穴纂要』を附録した。その他の多紀父子の著作は「卷帙浩繁」ゆえ未刊行だったので、版木を購入できた多紀父子等の著作、計一二部を重印したのである。

守敬がこれらの版木を購入したことは、『清客筆話』にも明治十五年（一八八二）十二月十九日の筆談記録がある。すなわち和刻漢籍の版木を求める守敬に、森立之が「記事本末八百圓」の価格を記すと、守敬は「余已購多紀醫書板、故力不及此。（多紀醫書板）十五品、四百圓也」と記している。<sup>67</sup> 當記録より、守敬が當該版木を明治十五年十二月十九日以前に購入、ないし購入契約したことが分かる。ただし多紀家の版木を「十五品」と記すのは、守敬が實際に重印した當叢書の一三部と一致しない。恐らく「十五品」とは守敬序にいう活字本で版木のない『靈樞識』『雜病廣要』を含む數で、まだ版木を精査していなかったため誤認したのだろう。さらに本筆談は立之と價格の駆け引きをする中で、『通鑒』記事本末』の和刻版木八百圓が高くて購入できない理由として、守敬が記している。したがって、はたして多紀家の版木が四百圓だったかどうかは確證できない。<sup>68</sup>

ところで守敬が入手した多紀家版木の初版は、前述のように一七九五年から一八五四年の六〇年間に跨っており、多くは多紀本家の「聿修堂藏板」ないし分家多紀元堅の「存誠藥室藏板」として刊行された書だった。江戸醫學館が廢止された明治維新以後、それら版木は多紀家に保存されていただろう。醫學館を最後に主宰した多紀元琰は明治九年（一八七六）



に五十三歳で没している。當時の情況は明治七年（一八七四）に新醫制が定められ、從來の傳統醫師はその一代限りの醫業が許可され、新たに醫師となるには西洋醫學の七科を學ばねばならなかった。森立之は守敬にこう記している。<sup>(69)</sup>

明治已來洋說盛行、國政已洋、官服亦然、在醫業亦然。不洋則非醫、漢醫者老生則一生爲涯（限）、其子則必不學洋不得爲醫家。如此一佈告之後、僕廢醫業爲學徒、不公執刀圭、……。

この社會情況の中で一轉して官醫の祿を失った多紀家は、家學の集大成といえる著述も價值が失われ、ついに家傳の版本まで楊守敬に手放すことになった。しかし守敬が『聿修堂醫學叢書』として中國で重印したため、その學問は後世に伝えられることになる。

當叢書が日本の版本で重印されたのは、守敬印本の木記からすると光緒十年（一八八四）八月の一回しかない。しかし現存書の原裝幀には數種があるので、黃岡以降に武昌でも需要に應じて幾度か再印されたい。當版本は武昌城外の別莊に置かれていたため、辛亥革命の戰亂に保護を受けず、失われてしまった。ただし守敬が上海で寓居していた民國二年（一九一三）、當叢書は上海の江左書林から石印本として出版されている。當然ながら版本を失った守敬の委囑を受けてのことだろう。さらに民國二十四年（一九三五）には上海中醫書局より鉛印本として復刊された。その翌年に上海の世界書局が刊行した『皇漢醫學叢書』には、當叢書の全書が編入されている。『聿修堂醫學叢書』あるいは『皇漢醫學叢書』からの單行本<sup>(70)</sup>や注釋等<sup>(71)</sup>は現在に至るまで數多く刊行され続け、その影響は中國のみならず今の日本にも及んでいる。

他方、守敬による當叢書の出版は、日本人による傳統醫學研究を中國に體系的に紹介する嚆矢だった。これを契機として以後、考證醫學に限らず、日本の傳統醫學研究書の多數が中國で出版されている。<sup>(72)</sup>さらに『經籍訪古志』（二八八五初版）と『日本訪書志』（一九〇一刻）の刊行も加わり、中國の識者は日本に多くの善本古籍があるのを知り、後の訪日者にこれらの閱覽や購入を促すことにもなった。

## 2 『脈經』の校刊

楊守敬は歸國九年後の光緒十九年（一八九三）、『脈經』一〇卷（圖2）を景蘇園より刊行した。當版の守敬序に記される同族の楊葆初（字・壽昌）は、守敬が居住した黃岡の知縣を光緒年間に任じ、蘇軾の書を景仰した『景蘇園帖』を同じ光緒十九年に著している。すると「景蘇園」は楊葆初の室號だろう。守敬序は「吾宗葆初大令存心濟世、若不遑及見亟墨諸版」と記すので、葆初の資金援助で出版したと思われる。なお當版は題簽に「景宋王叔和脈經」と印刷され、内封に「景宋王本脈經」、守敬序に「景宋王叔和脈經」と題するため、『景宋脈經』と呼ばれることが多いが、筆者は内題に従い守敬本『脈經』と呼ぶ。

當版の守敬序は『脈經』の宋版以降諸版を記し、善本が世に稀と述べた後で、當版の特徴を次のように記す。

余從日本得宋刻何氏原本、又兼得元明以來諸本、乃盡

發古醫經、與之互相比勘。凡有關經旨者、悉標於簡端。

非唯可據諸經證此書、亦可據此書訂諸經。……此書出、

吾願天下之業斯術者、未能洞徹此旨、慎勿漫蒙刀圭。

光緒十有九年夏四月、宜都楊守敬記于鄰蘇園。

この言に従うなら、南宋嘉定十年（一二二七）に何大任が後序を記して刊行した宋版を、彼は日本で入手している。さらに元明諸版も入手しており、他の古醫經も加えて相互に校勘し、守敬本『脈經』を刊行したことになる。それゆえ當版の木記には「光緒癸巳景蘇園校刊」とあり、あえて



圖2 楊守敬本『脈經』（中國國家圖書館藏、景蘇園刊、1893年）



「校刊」を記したのだろう。さらに守敬は當序全文の五箇所を變えた文章を、『日本訪書志』に「脈經十卷 宋嘉定何氏本」の解題として轉載し、日本で何大任宋版を入手したことを廣く知らしめている。

ところが森立之ら『經籍訪古志』や小島尙眞『醫籍著錄』によれば何大任宋版は日本になく、明代の仿何大任本だけが多紀家聿修堂・越智家懷仙閣（曲直瀬家養安院舊藏）・福井家崇蘭館の各々に所藏されていた。現在、聿修堂本は内閣文庫に傳わるが、懷仙閣本と崇蘭館本の所在は分からない。そして守敬本『脈經』卷六末尾には「養安院藏書」の印記が模刻されるので、彼が入手した「宋刻何氏原本」とは養安院舊藏の懷仙閣本だったと推定される。

前述のように守敬は『經籍訪古志』も『醫籍著錄』も所藏しているので、兩書が懷仙閣舊藏本を「明代模彫宋本」や「明彫何大任本」と鑒定するのも疑いなく承知している。ちなみに日本舊藏本ではないが、同一の仿何大任版について中國國家圖書館は楊紹和跋本を「明刻本（編號八七二）」、臺北故宮博物院は「明覆刊宋嘉定間何大任本（箱號五九、律號二二二）」、臺北中央研究院傅斯年圖書館は唐翰跋本を「明嘉靖間覆宋刊本（排架號一〇八〇）」と著錄する。そして眞の何大任宋版は中國・臺灣にも現存著錄がない。

しかし守敬が誤解していた可能性も少しはある。彼が『日本訪書志』に「脈經十卷 明刊本」と著錄する書は小島尙質の手澤本で、こう記される。

小島朱藍墨筆校記、其硃筆者嘉定何大任本、藍筆者明淮陽刊本、墨筆者則據素靈難經傷寒甲乙等書、可稱精詳。……小島未以千金校之、且至六卷以後亦第以宋本互校、未及旁引他書、甚爲漏略。故余復以硃筆勘之、凡見於諸醫經者、異同悉著之、不嫌其煩瑣也。

この小島尙質手澤本は臺北故宮に、明童文舉翻刊袁表本（箱號五六七、觀字號六六九）として所藏される。守敬が記すごとく當本は朱藍墨筆の校記に満ち、それらは尙質が十八歳の文化十一年（二八一四）、恐らく初めての古醫籍校讀會を友人・門

人らと、五日ないし十日間隔で開始した時のものである。尙質の識語によると、校讀會は同年の四月二十四日から十二月二十日までと、尙質二十五歳の文政四年（一八二二）十月十一日から十一月二十四日までの期間、二度開催された。彼らは明版との校勘に熙寧三年官刊小字宋版『脈經』を使用するが、後に官刊小字宋版は何大仁宋版だったと訂正している。當時は彼らもまだ版本鑒定レベルが低かった。對校本を何大仁宋版と判斷していたが、明代仿宋版と改めるのは尙質の晩年から尙眞の時代で、それが『經籍訪古志』や『醫籍著録』に反映されている。ただし尙質が何大任宋版と書いていたので、守敬はそれが古い判斷と氣づかず、自己の入手書も宋版と思い込んだ可能性はある。

他方、尙質は素問・難經・仲景書・千金方に見える關聯記載を、全一〇卷に互って欄上に書き入れており、守敬が「小島未以千金校之、且至六卷以後亦第以宋本互校、未及旁引他書、甚爲漏略」と記すのは全く當たらぬ。ただし「故余復以硃筆勘之、凡見於諸醫經者、異同悉著之、不嫌其煩瑣也」と記すのは事實で、その記載が臺北故宮の守敬本朱印『脈經』（箱號五〇三、觀字號六六八）に見える。當本は全卷の欄内・欄外に守敬の筆で、袁表景從本・宋本千金方・素問・史記扁倉傳正義・難經集注・千金翼方等による考異が記入されている。また當考異の一部を守敬以外の筆で清書した稿紙一枚が書中に插まれ、これは正式刊行前に修刻すべき文字を書き出したものらしい。

すると守敬は文字校正以外の目的も兼ねて當考異を行い、その時に尙質手澤本も参照したことになる。この校正と考異を前提に、守敬本『脈經』の序文および『日本訪書志』の宋嘉定何氏本解題で「亦可據此書訂諸經」と豪語するのだろう。また『日本訪書志』では「亦可據此書訂諸經」以下に小字雙行で「別詳／札記」と書き加えており、考異を纏めた「札記」の存在を示唆する。ただ筆者が實見した守敬本『脈經』<sup>③</sup>二部には「札記」がなく、類似文献の存在も知られていない。そもそも『日本訪書志』だけに注記しているので、守敬本『脈經』に「札記」は本来なかった可能性が高い。

當檢討および守敬の自序から容易に推定されるように、守敬本『脈經』の一部文字は別版本さらに他の醫古典で明らか

に校訂されている。さらに一部の缺卷ないし缺葉が復原されている可能性も疑う必要がある。ならば當版は内題を除き、外題・内封・序ともに「景宋」を謳うが、けして何大任本や仿何大任の正確な影刻本とは言えない。とはいえ、守敬は同様の影刻を知った上で當版を校刊している。

例えば嘉永二年（一八四九）の江戸醫學館影宋刊『備急千金要方』は、臺北故宮に守敬舊藏本が二部ある。底本の宋版に缺葉や不祥文字が多かったため、醫學館は他版・他書で補足・校勘・修訂すると同字に、主に小島尙質の指揮で校勘結果を附録の「攷異」一卷として刊行していた。<sup>(14)</sup>これより二〇年前の文政十二年（一八二九）に江戸醫學館は元版『千金翼方』を覆刻し、これにも尙質が盡力している。<sup>(15)</sup>その守敬舊藏本も臺北故宮に二部ある。その一つが『日本訪書志』に「千金翼方三十卷 校元本」と著録される尙質舊藏本（箱號一〇五一、觀字號七二二）で、「小島尙質以初印本硃校于欄外上、……諸書合校者自丁亥訖己亥、首尾十二年始成、其精核可想。又按森立之云、翼方初擬附考異二卷而未成、當即以小島校本爲之也」と記される。このように日本ですら宋元版を影刻する時、校勘と考異をする場合のあることを守敬は知悉していたはずである。

守敬本『脈經』にはまだ疑問とすべき点がある。當版は象鼻の多くに刻字數があり、下象鼻には刻工名が刻まれる。しかし、いずれも筆者が實見した明の仿何大任本にはない。ただし版式・構成内容は両者が完全に一致していた。ならば守敬が言うように眞の何大任宋版を底本とし、それには刻入されていた刻字數・刻工名を轉載したのだろうか。守敬本には以下の刻工名が見える。

少、山、饜、古、仁、文甫、文、云山、長發、煥、介、惟、法、兮、太、炳、林、里千、石、麟、福、呂、貴、寬、  
岩、長、昌、全、心、采、界、甫、今、臣

以上の刻工名で、王重民『中國善本書提要』附録の「刻工人名索引」<sup>(16)</sup>に見えるのは文・林・呂のみである。また宋版の

刻工名は姓を含めた二字・三字も混在する例が一般に多く、かくも一字ばかりは宋版ならば不自然というしかない。一方、當版書末には「鄂省三佛閣／陶子麟承刻」の刊記がある。當版を承刻した鄂（湖北）省三佛閣の陶子麟とは、守敬の出版物に多く携わり、守敬の羅振玉宛書簡で「陶子林亦顧攫錢、純無感情、……刻字惡劣、猶其小焉者」<sup>77</sup>と酷評される人物に間違いない。すると上記刻工名にある「麟」「林」は陶子麟（林）と思われ、他は彼の工房等の刻工名だろう。

守敬本『脈經』は刻工名索引のない時代に「景宋」を冠して刊行されており、當版にある刻工名・刻字數は宋版を底本とした證據と理解されただろう。明仿何大任本にない兩者を守敬が加えたのは、何大任宋版を底本に影刻したと人々に誤認されるのを豫想した操作と判斷するしかない。なお當版には未刻の墨丁が5-3b・7-18a・8-11aにあるが、そうした墨丁は明仿何大任本に一切ない。すると守敬の入手した懷仙閣本は當該箇所が蟲損などで判讀不能だったか、あえて墨丁を作ることと宋版に基づいた風を装った可能性すら疑いたくなる。

守敬はなぜこうした當版を、楊葆初の援助まで仰いで刊行したのだろうか。想起すべきは守敬が森立之と頻繁に交流し、多紀家や小島家等の研究業績も入手し、彼らの考證醫學に影響を受けていたことである。『日本訪書志』には彼らへの讃辭とともに、模倣、時には反發とも讀める言辭が見られる。彼らの中心だった江戸醫學館は各種の大事業を行っており、その一つが前述の『千金方』『千金翼方』および注（9）に挙げた古醫籍善本の校訂・刊行だった。しかし彼らの豫定ないし希望にはあっただろうが、種々の原因で善本を校刊できなかった唐以前の醫書に、『靈樞』『金匱要略』『脈經』『甲乙經』『黃帝明堂經』『黃帝內經太素』『外臺祕要方』がある。守敬は當事業を繼續したいと考えていたのではなからうか。これら未刊書の内、守敬は善本といえる『黃帝內經太素』『外臺祕要方』の影寫本を入手していたが、ともに大部な書で個人刊行は不可能だった。そして大部でもない善本を入手していたのが『黃帝明堂經』と『脈經』の二書である。

中國で散佚した『黃帝明堂經』の仁和寺本古鈔本存卷一は小島尙質が雙鉤で影寫しており、小島原本は杏雨書屋（杏四五

○(一)に現存する。守敬は『日本訪書志』で曖昧に記すが、森立之が所蔵していたらしい小島原本から轉寫したと思われる。<sup>⑧</sup>陳によると、守敬は汪康年の求めで光緒十七年(一八九二)頃に『黃帝明堂經』『悉曇字記』『帝範』を刊刻していた。その版本は武昌にあり、羅振玉が刊行を企畫した『國學叢刊』に入れるよう守敬は提言したが、辛亥革命等で頓挫している。版本は『脈經』も彫った陶子林が民國元年(一九二二)三月段階まで管理していたが、翌年時點で陶子林からの連絡が途絶えている。この『明堂經』刊行に繼ぐのが、守敬本『脈經』の校刊だったと考えられよう。ともあれ當版は一般に影宋版と理解され、かなり歓迎されたい。中國の『全國中醫圖書聯合目錄』には三〇機關の所蔵が著録され、『脈經』の諸清版中では最も多い。<sup>⑨</sup>

興味深いことに、守敬本『脈經』の影刻版も出現した。光緒三十一年(一九〇五)の長沙・徐德立(橘隱園)序刊本(圖3)である。中國國家圖書館藏本(編號二二五二四)では表紙に「景宋本脈經」を印刷、内封に「景宋本脈經／石耕山人書」裏に「光緒乙巳夏月長沙徐氏橘隱園校刊」の木記がある。徐德立序には「歲甲午(二八九四)、楊葆初大令寄贈影宋精本(脈經)於京師、吾師(黃昌邑)一見欣然、屬予重刻廣其傳」[「楊刻之未廣、屬長沙駱君重摹、成書凡十閱寒暑始竣」と記される。毎葉象鼻の多くに刻字數、下象鼻に刻工名があり、兩者は守敬本と完全に一致していた。卷六末尾に「養安院藏書」の印記も模刻し、書末に「長沙駱雲驥／影摹鐫刻」の刊記がある。こうして徐德立は約一〇年を費やし、楊葆



圖3 徐德立本『脈經』(中國國家圖書館藏、橘隱園刊、1905年)



初から贈られた守敬本を、長沙の駱雲驥に依頼して影刻したという。徐德立本には守敬序もあり、一見すると守敬本と酷似する。しかし守敬本の未刻墨丁を空白に彫り、刻字がやや劣るなど特徴があり、全くの別版だった。

このように守敬本は當時の通行諸版中では最善と認識され、一九五七年には上海衛生出版社、翌一九五八年には上海科技衛生出版社が各々『景蘇園本脈經』を影印出版している。一方、『四部叢刊』子部には上海涵芬樓藏の元廣勤書堂刊『新刊王氏脈經』が影印収録された。さらに北京の人民衛生出版社は『四部叢刊』本を一九五六年・一九八二年に縮刷影印、日本では一九八一年の『東洋醫學善本叢書』に靜嘉堂文庫所藏（陸心源舊藏）の明仿何大任本が影印収録された。そのため守敬本『脈經』の存在が忘却され、今日までその實體に検討が加えられていなかったのである。

### 3 『武昌醫館叢書』出版への協力

楊守敬は自身で出版する以外に、所藏書を友人に譲渡や貸與等を行い、多くの古籍刊行に係わっていた。醫書では柯逢時（一八四五～一九二二）編の『武昌醫館叢書』八種（一九〇四～一二）に關與している。張之洞が光緒二十八年（一九〇二）に開設した武昌師範學堂には衛生學科もあり、これを承けて張之洞の門生で同じく政治家だった柯逢時は晩年、私設の武昌醫館を設立した。よって武昌醫館の設立は光緒二十八年以降、閉館は柯逢時没年の民國元年（一九一二）と考えられている。武昌醫館では武昌の名醫を教師に招き、優秀な學童に教材まで無料で醫學古籍籍中心の三年制教育を行い、附設の診堂では臨牀實習もなされた。<sup>(80)</sup>

一方、柯逢時も大藏書家で、張之洞の招聘で光緒二十五年（一八九九）に武昌に移り住んだ楊守敬と親交があった。守敬は江戸醫學館が行った教育研究や善本刊行を相當に知っていたはずなので、武昌醫館の設立や醫書出版には彼のアドバイスがあった可能性もある。守敬は一八九一年頃に『黃帝明堂經』、一八九三年に守敬本『脈經』を刊行したが、その藏書に

は中國で刊行普及させるべき善本醫籍がまだ多數あった。そこで政治力と財力を兼有する柯逢時が行った醫書出版に、守敬は多大な協力を行ったと思われる。以下の①を除き、武昌醫館では柯逢時の指揮・出資による出版が陸續と行われた。

- ① 宋・艾晟『(重校) 經史證類大觀本草』三二卷、光緒三十年(一九〇四)刊。
- ② 清・柯逢時『大觀本草札記』二卷、宣統二年(一九一〇)刊。
- ③ 宋・寇宗奭『(重刊元本) 本草衍義』二〇卷、宣統二年刊。
- ④ 宋・郭雍『(重校) 傷寒補亡論』二〇卷、宣統三年(一九一三)刊。
- ⑤ 元・曾世榮『(重校) 活幼心書』三卷、宣統三年刊。
- ⑥ 宋・龐安時『(重刊) 傷寒總病論』六卷、民國元年(一九一三)刊。
- ⑦ 漢・張機『傷寒論』一〇卷、民國元年刊。
- ⑧ 宋・錢聞禮『(重刊) 類證增注傷寒百問歌』四卷、民國元年刊。

このように光緒三十年の①、宣統二年の②③、宣統三年の④⑤、民國元年の⑥⑦⑧と、前後四回に亘って計九六卷が刊行された。最大は①で、卷数は全體の三二%に及ぶ。また①③⑥⑦は仿宋ないし仿元の字體で刻版される。③の卷一九末葉には「陶子麟鈐刊」とあるので、守敬が以前刊行した『黃帝明堂經』『脈經』と同様、武漢の陶子麟を中心とした刻工グループが多く彫版を擔當しただろう。これら八書の版本は辛亥革命の戦亂を免れ、民國時代に『武昌醫館叢書』として一括印行された。その版本は現在、北京の中國書店が所有して重印販賣しているが、影印葉が各書に混じるので、版本の一部は散佚ないし斷裂したと思われる。

本稿では守敬が種々の協力をしたと考えられる①②③⑦⑧について検討を加えたい。

(1) 『重校』 經史證類大觀本草』と『大觀本草札記』

當『重校』 經史證類大觀本草』には柯逢時の序一葉があるが、底本へは言及しない。また序末「光緒三十年」以下の「冬武昌柯逢時序」部分は修刻で、理由ははっきりしないが、後述する宣統二年（一九一〇）の第二次刊行時の修刻と關聯するかもしれない。全書の版式・字體は元版を彷彿させ、全三二巻の彫板には少なくとも數年を要したと思われる。また當本だけが内封裏の木記に「武昌醫館」の文字がなく、「光緒甲辰（三十）武昌／柯氏重校某印」とのみ刻される。

一方、『大觀本草札記』には柯逢時が宣統二年六月に記した序があり、「楊君惺吾（守敬）爲余影摹此本、突過原刻。既畢工、復據政和異同、參互校訂、以爲札記、三年而後成」「又六寒暑、始得校定剋改、刊附卷末、以貽同志」とある。これより以下の諸點が分かる。

當版の底本は守敬が提供した影寫本で、原刊本にも優る出來ばえだった。

當版の版木を彫り終えた後、同じ『證類本草』系統の『政和本草』と異同を校勘し、三年かけて『札記』の原稿を作成した。

さらに六年を費やし、『札記』の成果により當版の原刻版木も修刻した。

これらが宣統二年に完成し、修刻『大觀本草』の末尾に『札記』を附して出版した。

以上から逆算すると、守敬は光緒二十七（一九〇二）前後に影寫本を柯逢時に提供したらしい。そして當版の原刻が出來た光緒三十年、逢時は序文を記して第一次刊行している。この原刻には多くの問題があったため修刻し、その根據を記した『札記』も附録して宣統二年に第二次刊行（圖4）したことが分かる。

當『札記』は計九年を費やただけに、その校異は徹底している。單に字句の相違を指摘するのみならず、時には相違の是非を判斷して原文を校訂すると記す。さらに守敬提供寫本の缺文・缺字も一々記すが、それらを補足すると原本と異



なる體式となるため、指摘に止めている。校異の多くは『政和本草』によるが、一部には朝鮮本『大觀本草』、古鈔本『新修本草』、『太平御覽』等も用いられる。本草書の復刻でこうした精緻さは空前絶後と言ってよく、當『大觀本草』の木記に「重校」が記される所以も理解できよう。

一方、臺北故宮には當『大觀本草』の朱印本（箱號二一八六、觀字號なし）があり、全書三一卷にわたり守敬の墨筆・朱筆で詳細な文字校正がなされている。これらは誤刻・缺筆・異體字・陰刻・陽刻の指摘、また汚れの除去等まで徹底して指示する。そして『政和本草』『本草綱目』『病源候

論』『肘後方』、宋本『外臺祕要方』や日本人の校正が、しばしば根據に記される。當版の朱印本は湖北省圖書館にもあり、守敬による同様の書き入れがあると陳も報告する。<sup>81</sup> 兩朱印本の校正は、恐らく一方が當『大觀本草』の第一次刊行以前、他方が第二次刊行以前になされたのだらう。なお守敬が記した日本人の校正とは、臺北故宮の舊觀海堂本にある二書から引用された可能性が高い。一つは萬曆五年南陵王秋尙義堂刊・同三八年修補『重刊經史證類大全本草』（箱號一四四二、觀字號七〇三）で、當本の卷三から卷六には小島尙質らが文化十一年（一八一四）に元大德宗文書院版『大觀本草』と校勘した書き入れがある。いま一つは元大德宗文書院版の朝鮮重刊『經史證類大觀本草』（箱號一二六二、觀字號六九九）で、當本では卷二一までの全書に嘉永六年・七年（一八五三・一八五四）にかけて徳正備が校訂を書き入れる。したがって柯逢時らが『札記』に使用した朝鮮本『大觀本草』も、守敬から借用した後書の可能性が高い。逢時は守敬から影寫本を提供されたとしか記



圖 4 武昌醫館修刻本『經史證類大觀本草』（著者藏、北京・中國書店、1980 年）

さないが、實際は校正等にも守敬が相當に盡力していたことが以上から理解されよう。

『札記』には逢時の序に續けて「重刊大觀本草凡例」があり、その冒頭で守敬が提供した影寫本の底本たる版本をこう記す。「元大德壬寅宗文書院刊本卷首有木記。……此本字體行款與大德本同、序後顧無宗文木記、惟刻印較精、今據以上板」補足すると、元宗文書院刊本は書頭に艾晟序文が第一葉と第二葉の表まであり、第二葉の裏は餘白で「大德壬寅孟春／宗文書院刊行」の木記だけがある。つまり守敬が所藏していた版本は當木記がないだけで、他は宗文書院版と同版式かつ刻印が一層美しかったらしい。

これに該當する版本は『日本訪書志』『日本訪書志補』ともに著録されないが、國家圖書館〔臺北〕に現存する。同圖書館目録に「元大德壬寅（六年）宗文書院刊本」と載る守敬舊藏本（書號〇六二二）（圖5）がそれで、當本の見返しにある守敬の自筆題記にこうある。

……此爲南宋刊本、元宗文書院即從此出。序後有宗文書院木記、此本無之、是其證也。且此本爲初印、無一葉殘缺、尤可寶也。癸丑（一九一三）五月、鄰蘇老人記

つまり守敬は宗文書院の木記がない當本を南宋版とし、この南宋版を元の宗文書院が影刻し、その時に艾晟序文の餘白裏面に木記を加えたと判斷している。しかし當本を筆者が二〇〇一年八月十四日に實見したところ、艾晟序の餘白裏面に木記がないのではなく、裏面の餘白全體が破り去られていた。これに早く注目した阿部はこう記す。<sup>(82)</sup>



圖5 元・大德刊本『經史證類大觀本草』（楊守敬舊藏、國家圖書館〔臺北〕藏）

この本は序後の刊記の所が破かれているが、この所に「大德壬寅孟春／宗文書院刊行」の木記を有する靜嘉堂文庫本と比較するに同版である。楊守敬がこの本を宋版とし、大德宗文書院版の明前期の覆刻版（故宮博物院觀海堂藏）を宗文書院版となしたのは失考である。この本は早印にして印面頗る美しい。

筆者も同意見だが、阿部は當本と柯逢時本との關係に言及しない。他方、渡邊は柯逢時本のいくつかの特徴から「宗文書院刊本、又はその直系の書が底本であったことは明らか」とし、候補に『經籍訪古志』著録の明重修宗文書院刊本（阿部が上と言う明前期の覆刻版）の可能性を考えた。<sup>(83)</sup> 岡西も渡邊説を踏襲するに止まる。<sup>(84)</sup> なお柯逢時が當本を實現していたことは、上述凡例で「惟刻印較精」と記すことから明らかだろう。彼が守敬の宋版説も知っていたらしいことは、『世載堂雜憶』にある以下の逸話から傍證し得る。<sup>(85)</sup>

守敬居武昌長堤、與柯逢時隣近。楊得宋刻大觀本草、視爲孤本、逢時許重價代售、請閱書一晝夜即還。柯新自江西巡撫歸、吏人甚衆、盡一日夜之力、抄全種無遺漏。

このように逢時が一夜にして全部を筆寫させたというのは虚構としても、守敬が當本を宋版と稱して賣ろうとしていたのは眞實に近いだろう。しかし逢時は凡例に宋版ではなく、「今據以上板」とだけ記す。守敬の宋版説に納得していなかったからに相違ない。當本を南宋版とする守敬の題記は上海で避難中の民國二年（一九一三）に記されている。そして宋版として誰かに賣った後、南京に開設された國立中央圖書館に收藏され、現在の國家圖書館（臺北）に傳えられた。

ともあれ柯逢時本『大觀本草』には元宗文書院の木記がないものの、彼の精力と財力により重校仿元版として再生され、詳細な『札記』とともに出版された。いま國家圖書館（臺北）本と比較すると、柯逢時本の精刻ぶりがよく分かる。このため日本では武昌醫館本の『大觀本草』『同札記』と後述『本草衍義』が一括して影印出版され、その解説部分のみ中國語に翻譯して本文を再影印した臺灣版も出た。<sup>(87)</sup> 『武昌醫館叢書』全體は今も、重印に影印を配して出版されていることは前述

した。それは柯逢時本『大觀本草』が、蒙古晦明軒刊『政和本草』（中國國家圖書館藏、北京・人民衛生出版社影印）と相補關係にあり、併讀されるべきことが醫學・本草研究者に廣く認知されているからである。

## （2）『本草衍義』

當版二〇卷（圖6）は前述の『大觀本草札記』と同じ一九一〇年（宣統二）に刊行された。内封裏の木記には「宣統二年武昌醫館／重刊元本附校記」とあり、これ以降の各本も同様に武昌醫館と使用底本が木記に明記されるようになる。當版に重刊の序はないが、書末に柯逢時の宣統二年跋一葉と校記六葉を配す。校記の末尾半葉餘には「宋本校勘銜名」が列記され、この位置にすることで底本にないのを「宋本」から補入したことを示している。

逢時の跋は守敬から提供を受けた文獻二種を記す。第一は守敬が校録した原稿である。それは彼が日本にいた時、書末に南宋慶元年の修板校勘銜名がある宋版『本草衍義』を借り、宋劉信甫『圖注本草』との異同を校録した原稿だった。第二は守敬から得た刊本の『本草衍義』で、本朝を宋朝と稱する部分があるため、守敬が元版と判断したという。當元版は既刊の『大觀本草』と體式が合うので影刻するが、守敬の校録原稿と他の版からも善い字句を選択して校正し、別に「札記」も作ると記す。

これに續く「本草衍義校記」は冒頭に當校記で使う略稱



圖6 武昌醫館刊本『本草衍義』（著者藏、北京・中國書店、1980年）

を説明する。すなわち元版とはいま影刻する刊本、慶元本とは慶元版『本草衍義』による守敬の校録、成化とは成化重刊『政和本草』の本文各薬項目末尾に補入されている『本草衍義』文、補註とは宋劉信甫『新編證類圖註本草』所引の『本草衍義』文、陸本とは光緒間の陸心源刊『本草衍義』という。校記では目録と各卷あたり三〇一三の語句につき、各版本で校異した結果、その異同から本文に對する補・刪・改・無・増・通用・同・訂などの判断が記される。『大觀本草札記』に比べると相當に簡略なのは、柯逢時が獨力・短時間で校異した結果かと思われる。この逢時の跋と校記からは、柯逢時が守敬の資料提供とアドバイスを強く依據したことが分かる。他方、守敬にとって當資料提供と出版に如何なる意味があったのだろうか。

ところで武昌醫館本『本草衍義』の版式と合致する守敬舊藏の元版(圖7)が現在、國家圖書館(臺北)にある(書號〇六二二二)。同館目録は「元覆刊宋宣和元年本」と著録し、武昌醫館本の刻字は當元版の特徴をよく傳えている。當元版には守敬の藏印記以外に、「松本氏／暴書印」「森氏開萬／册府之記」「讀杜／艸堂」「天下／無雙」などもあるので、松本氏・森立之・寺田望南という日本人の舊藏書だった。柯逢時の舊藏を示す藏印記や識語は見あたらないが、恐らく逢時が守敬から得た書だろう。當版には守敬手書の題識もあり、光緒丁亥年(十三、一八八七)に記されている。この時、守敬は黃岡で教諭だった。

一方、守敬の『日本訪書志』が著録する『本草衍義』は、



圖7 元刊本『本草衍義』(楊守敬舊藏、國家圖書館(臺北)藏)



「宋刊本」と記す一部しかない。その解題はいくつかの字句の相違と記年が省かれる以外、當元版の守敬題識と完全に一致する。つまり守敬は光緒十三年（一八八七）に當本の題識を記し、それを光緒二十七年（一九〇一）刊の『日本訪書志』に轉載する時、「宋刊本」と著録していた。柯逢時が「元版」を影刻したのは宣統二年（一九一〇）なので、その數年前には守敬から入手していただろう。むろん逢時とて『日本訪書志』は見ている。すると守敬は自著に公言した宋版の鑒定を改め、より價格が低くなる元版と認めて逢時に譲渡したのだった。逢時の武昌醫館本『本草衍義』跋文は、「本朝を宋朝と稱する部分があることで元版と判斷できる」を守敬の言葉として記すが、實際の二人の會話は逆で、守敬の體面上そのように逢時が記した可能性もある。

『大觀本草』も守敬が宋版と稱して逢時に提供したらしいが、逢時は「此本」「上板」の表現しか用いていない。そして逢時は『本草衍義』影刻の時點で、元刊本『衍義』は既刊の『大觀本草』と體式が合うと記し、柯逢時本『大觀』の底本は元版だったことを間接的に表現する。また守敬は『本草衍義』も宋版の鑒定を改め、元版として逢時に譲渡した。それは守敬が體面を失ったことを意味する。二人は同じ武昌で藏書家として著名だったが、社會地位と財力には格段の違いがあった。かくまでして守敬は逢時の力を頼り、自己の目的を達成していたことになる。それが分かる別の記載もある。

臺北故宮には守敬舊藏の『大觀本草』（箱號六四、觀字號なし）があり、「元大德壬寅宗文書院刊」と著録されるが、實際は前述した『經籍訪古志』著録の明重修宗文書院刊本や阿部『中國訪書志』にいう明前期の覆刻宗文書院版に該當する。當本には守敬藏印記の他に小島尙眞の「尙眞／私印」があり、『經籍訪古志』が「小島春沂（尙眞）近得明代重修本、行款字樣一與此本（大德壬寅宗文書院刊本）同」と記した書と分かる。また守敬の手書題記があって、『日本訪書志補』<sup>90</sup>および上記『中國訪書志』に轉錄される。當題記は末尾の四七字だけを除き、ほぼ同文が守敬の『日本訪書志』にも「元刊本」として載る。守敬が『日本訪書志』で除去した文末の四七字を以下に記そう。



後有刻此書者、以宗文原本還慎微之舊、別以寇氏衍義附刻其後、則盡善矣〔余得宋宣和／刻本衍義〕。光緒乙酉（一八八五）楊守敬記。

文頭の「此書」は漠然とした『大觀本草』、次の「宗文原本」は守敬が當題記を記す明前期覆刻宗文書院版、「慎微之舊」とはすでに散佚した北宋版『大觀本草』を指す。末尾に細字で記す「余得宋宣和刻本衍義」とは、當『日本訪書志』に宋刊本と著録し、柯逢時に元版として譲渡した『本草衍義』のことである。これを記したのは守敬が日本から歸國した二年後だった。さらに二年後、當該『本草衍義』に記した題識の末尾には、こうある。

（本草衍義）……有明一代遂無刊本、而四庫不得著錄、此當急爲流布者也。光緒丁亥年三月、宜都楊守敬記。

柯逢時が詳細な『札記』を作成しつつ『大觀本草』第一次版本に修刻を加えたのは、正しく守敬が『日本訪書志』で削除した四七字中の「還慎微之舊」に當たる。そして『札記』を附録した『大觀』第二次刊行の宣統二年、同時に『本草衍義』も出版された。守敬が明前期の覆刻宗文書院版『大觀』に「以宗文原本還慎微之舊、別以寇氏衍義附刻其後、則盡善矣」と手書した二五年後、逢時に元版として譲渡した『衍義』に「此當急爲流布者也」と記した二三年後、ついに彼の目的が達成されたのである。その目的とは、日本で得た善本を故國で普及させることに他ならない。『日本訪書志』に題識文末の四七字を載せなかったのは、こうした意圖が明瞭になると、逆に彼の念願達成に不都合となるからと思われる。さらに解題書を兼ねた一種の販書目録とも見られる『日本訪書志』の機能を損なわせないためでもあろう。

### （3）『傷寒論』

當版一〇卷（圖8）は戦亂の収束した民國元年（一九二二）十二月、他の二書と同時に武昌醫館から刊行された。楊守敬が武昌から上海に避難して一年數か月後のことで、柯逢時はこの年に没している。こうした理由だろうが、當版には刊行の

事情を示す序跋や校勘札記等が一切ない。ただ「傷寒論」とだけ記す内封の裏に、「民國元年十二月／武昌醫館刊畢」の木記があるのみ。しかし當『傷寒論』は從來から中國で流布していた成無己『注解傷寒論』などと全く違う。それから後世の注が全くない一方、林億ら北宋校正醫書局の校刊序と治平二年（一〇六五）の鏤版施行文、および元祐三年（一〇八八）に國子監へ發令した小字本『傷寒論』雕印の指揮文がある。同一の鏤版施行文と指揮文は、明の趙開美が編纂して萬曆二十七年（一五九九）に序刊した『仲景全書』所収『翻刻宋板』傷寒論<sup>91</sup>一〇卷にもある。しかし趙開美本の

各卷頭にある「明 趙開美校刻／沈 琳全校」がなく、版式も字様も相當に異なる。字様は趙開美本より一層宋版風で、かつて楊守敬が校刊した守敬本『脈經』によく似る。すると當版の彫刻はやはり陶子麟たちらしい。ただし宋版風でも宋の避諱・嫌名は見られず、玄などを缺筆する清の避諱があるにすぎない。筆者の管見範圍で以上の特徴を備えた版本は、現存の中國版・日本版・朝鮮版中で當武昌醫館本だけにしかなく、過去の目録にも著録されない。

一方、楊守敬の『留眞譜初編』（二九〇一刊）第七冊醫部には當版と酷似した『傷寒論』卷一の書影（圖9）が載る。<sup>92</sup>大きな相違は當版の版心が黒口で、『留眞譜初編』圖版が白口という點しかない。さらに守敬の同年刊『日本訪書志』には「傷寒論十卷 影北宋本」という書が載り、當書の解題後半には武昌醫館本や趙開美『仲景全書』本と同じ北宋の鏤版施行文と指揮文の全文が轉錄される。<sup>93</sup>守敬の解題で「影北宋本」に關聯する部分を以下に記そう。

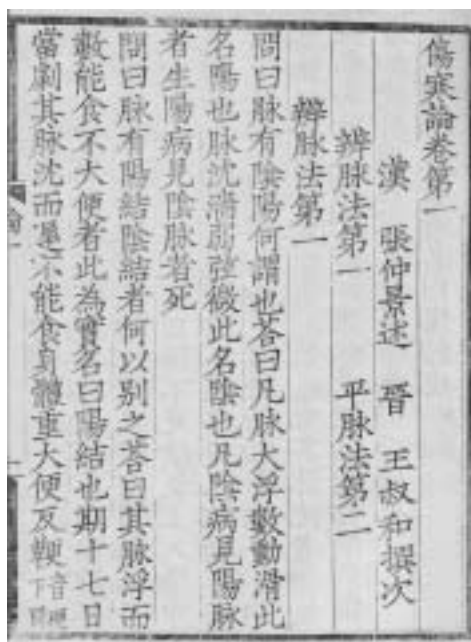


圖8 武昌醫館刊本『傷寒論』（著者藏、北京・中國書店、1980年）

余在日本初得其國寬文刊本。……後得其翻刻明趙清常（開美）仲景全書本、……。然開篇題名下即著明趙開美校刻、沈琳全校字樣是已非宋本舊式。最後於書肆得此影寫本。每半葉十行行十九字、首題傷寒論卷第一、次行題漢張仲景述、晉王叔和撰次、再下行低三格辨脈法第一、平脈法第二……。乃知趙氏本根源於宋刻、但爲題校刊姓名遂移其行第〔清常收藏名家／亦爲流俗所染〕。此本影寫精緻、儼然北宋舊刻。竊怪日本著錄家皆以趙開美本爲最古、而此本尙存其國、未見甄異、余乃無意得之。歸後屢勸人重刻、竟無應者。……

そして當文で「每半葉十行行十九字、首題傷寒論卷第一、次行題漢張仲景述、晉王叔和撰次、再下行低三格辨脈法第一、平脈法第二……」と記す版式は、正しく『留眞譜初編』書影および武昌醫館本のそれを示している。彼の記載に従えば、日本の書肆でこの影北宋本を得たので検討した。すると趙開美本は宋版に基づくものの、各巻の題名下に「明趙開美校刻、沈琳全校」とし、宋本の舊式ではないことが分かった。他方、當影寫本は體式・精緻さから判斷して、疑いなく北宋舊刻に基づく。そこで當影宋本の重刻を歸國後しばしば人に勧めたが、誰も應じなかった、という。

この『日本訪書志』の記載と『留眞譜初編』の書影に合致する尊敬舊藏寫本が、臺北の中央圖書館に所藏されることを小曾戸が最初に氣づいた。そして當寫本は趙開美本の影寫本を切り貼りし、北宋版の舊に復そうとしたものと報告している。<sup>94</sup> 當報告に接した筆者も、それが武昌醫館本『傷寒論』と關聯することを報文で觸れた。<sup>95</sup> さらに近年、筆者は國家圖書



圖9 いわゆる影寫北宋本『傷寒論』書影（『書目五編』所收『留眞譜初編』643頁、臺北・廣文書局、1972年）

館〔臺北〕（舊中央圖書館）所藏全古醫籍の調査を完結し、當寫本の概要も報告した。<sup>(96)</sup>そこで當本を調査検討した全容を述べたい。

當寫本は同圖書館に「傷寒論一〇卷四冊。日本鈔本。近人楊守敬手書題記」（書號〇五八九五）と著録される。見返しを剥がした部分に守敬の題記一葉があり、他の識語はない。料紙は日本の薄葉斐紙、版心白口、中國薄葉楮紙で總裏打ちされ、「飛青／閣藏／書印」「楊守敬印（回印）」「吳興張氏適園收藏圖書（張鈞衡（二八七二）一九二七）」「荏圃／收藏（張乃熊、鈞衡の子（二八九一）一九四二）」の藏印記がある。

當寫本はその内容からして、明らかに趙開美『仲景全書』本に基づく。ただし『仲景全書』には日本に傳存しない明・趙開美の第一版・第二版と、第一版に基づき日本にだけ傳存（紅葉山文庫舊藏・現内閣文庫所藏）する明末清初間無名氏覆刻の第三版（圖10）がある。<sup>(97)</sup>そこで當寫本と『仲景全書』の三版本で字句・文字の相違を比較すると、第三版所收の『宋板』傷寒論』と『注解傷寒論』の特徴・傾向とのみ完全に一致し、第三版が筆寫底本と分かった。『宋板』傷寒論』にはいわゆる目録がないので、當本は『注解傷寒論』から目録だけを利用する。一方、紅葉山文庫藏の第三版『宋板』傷寒論』を多紀元昕が嘉永四年（一八五二）に影寫し、これに基づき堀川未濟が安政三年（一八五六）に影刻した『宋板』傷寒論』（圖11）も日本にはある。兩版を比較すると、堀川本は第三版の破損や未刻墨丁の文字等を多くは補

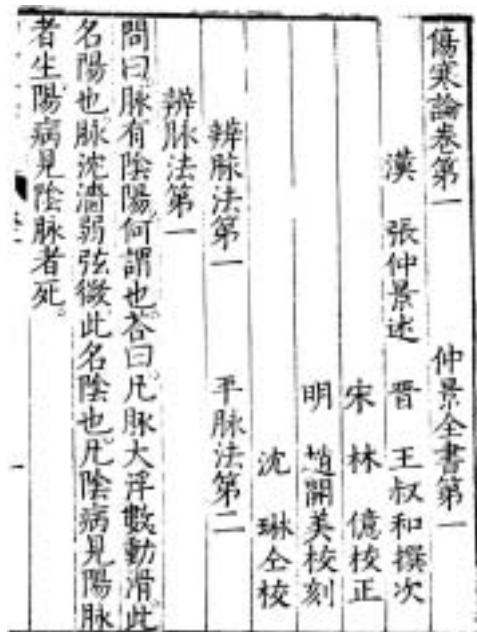


圖10 明末清初・第3版『仲景全書』本『傷寒論』（内閣文庫藏、東京・燎原書店影印本、1988年）

足していた。そして當寫本には堀川本が補足した文字等を見いだせない一方、第三版とは合致する。以上より當本の筆寫底本は紅葉山文庫舊藏の第三版と確定された。

他方、當本は料紙が日本でのみ生産される薄葉斐紙で、筆寫等の特徴も勘案すると、江戸後期～末期の寫本と判斷された。當本の文字と書式は比較的精緻に模寫され、誤寫や字様まで丁寧に欄外に校正されている。また筆寫底本が刊行された堀川本ではなく、一般人が利用不可の幕府紅葉山文庫本なので、幕府醫學館關係有力者の舊藏本だろう。

ところで臺北故宮には諸特徴から第三版『仲景全書』に

基づく判断される『金匱要略』卷上の日本寫本一冊（箱號五〇三、觀字號六二七）があり、やはり斐紙に模寫されている。

この『金匱』書末には朱筆で「安永二年乙卯（一八五五）仲冬（十一月）廿二日、以原刊對勘畢。尙眞」の識語があり、各所に朱筆で字形等の注記がある。すると小島尙眞は紅葉山文庫の第三版所收『金匱』を能書家に模寫させ、それを安永二年十一月二十二日に原本と對勘していた。當然ながら尙眞は同時に第三版所收の『宋板』傷寒論』と『注解傷寒論』も模寫していただろう。そして當「切り貼り」本の欄外に残存する誤寫訂正の記入（9-19bの「……上脫一字」など）は、尙眞の筆と思われる。これらからすると尙眞が模寫した『宋板』傷寒論』と『注解傷寒論』が切り貼りされ、當寫本が製作されたと判斷できる。

以上のように、當本は幕府紅葉山文庫本に基づき小島尙眞模寫本を使用していた。その寫本から、守敬が趙開美の所加

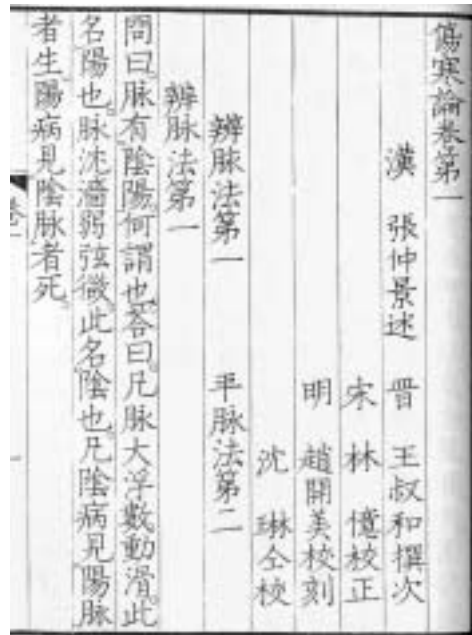


圖 11 堀川末濟影刻本『傷寒論』（東京・自然と科學社影印本、1991 年）



という部分を切り落としている。そうすると行数が減るため、版心が正常な位置からずれる。そこで版心も切り落とし、新たに白口・白魚尾の版心を加えた。以上の結果、裁斷された一葉あたり五〇六片を中國の薄葉楮紙で總裏打ちして連結し、再装幀したのが國家圖書館〔臺北〕本（圖12）だった。中國楮紙で斷片を裏打ちしているので、これら切り貼り作業は中國でなされただろう。またこうした作業のモデルとなるべき『傷寒論』は現存せず、過去の所藏も知られていない。國家圖書館〔臺北〕の當「切り貼り」本が守敬の舊藏で、彼が『日本訪書志』に「竊怪日本著錄家皆以趙開美本爲最古、而此本尙存其國、未見甄異、余乃無意得之」と自慢するのであれば、こうした作業が誰の手になるかはいうまでもない。

他方、武昌醫館本『傷寒論』の目録は、當「切り貼り」本の目録を簡略にしたことが比較で明らかだが、もはや來源が『仲景全書』本『注解傷寒論』の目録だったとは分らない。さらに「切り貼り」本と武昌醫館本の本文字句は一部で一致せず、それら不一致文字は趙開美第一版・第二版の『宋板』傷寒論とも一致しない。他方、それら不一致文字は前述の堀川本、さらに寛文八年（一六六八）の岡嶋玄亭翻刻『宋板』傷寒論、寛政九年（一七九七）の淺野元甫翻刻『校正宋板』傷寒論と箇々に一致する。すると武昌醫館本は「切り貼り本」を底本とし、堀川本や他の和刻『傷寒論』等で不詳文字や問題文字を改め、版下が作製されたと推定される。



圖 12 切り貼り本『傷寒論』（楊守敬舊藏、國家圖書館〔臺北〕藏）



さらに當「切り貼り」本の守敬自筆題記には以下が記される。

此影北宋傷寒論、篇中多互見之文、以人命至重、古人不殫反覆叮嚀、意至深遠。漢書藝文志是其前規、自金成無己作注解、將其重複者概刪之、以後世遂無仲景完本。余乃於日本得此影抄、滿擬歸而刻之、奈其知者少、荏苒歲月、仍未遂苦心搜羅之願。癸丑（一九一三）端午、鄰蘇老人題。

この題記も「切り貼り」本が北宋版の日本影寫本という。また「滿擬歸而刻之、奈其知者少、荏苒歲月、仍未遂苦心搜羅之願」と、重刻はできたが價值を知る人が少なく、まだ願いは達成していないと嘆く。むろん「滿擬歸而刻之」が一九一二年刊の武昌醫館本を指すのは疑問の餘地もない。守敬は『日本訪書志』を編刊した一九〇一年以前までは、該書で「歸後屢勸人重刻、竟無應者」と誰もが無反應と嘆いていた。そして柯逢時の援助を得てようやく武昌で出版できたものの、守敬が當題記を記した一九一三年に避難していた上海では、誰も武昌醫館本を知らなかったのだろう。さらに困窮していたため、不要となった「切り貼り」本に題記を認め、當本に藏印記のある張適園・張荏圃父子に譲渡したことになる。民國五年（一九一六）刊の『適園藏書志』卷六に、「傷寒論十卷。傳鈔本。漢張機撰。宋高保衡等校上。日本寫本。楊惺吾推爲北宋本、無確證也」と記されるのは當「切り貼り」本に間違いない。だが「楊惺吾推爲北宋本、無確證也」と、やはり疑念を抱かっていたのだった。

ところで日本では趙開美『仲景全書』からの各種單行本『〔宋板〕傷寒論』が、現在に至るまで八版を数え、その最初は上述の一六六八年刊の岡嶋玄亭本だった。一方、武昌醫館本は中國における趙開美本系『傷寒論』、具體的には復原宋本『傷寒論』の嚆矢だった。しかし歷代中國では『注解傷寒論』系の刊行が大多数で、『〔宋板〕傷寒論』への嗜好がほとんどなかった。また識者が武昌醫館本の眞僞に疑念を持ったためか、當版は現在まで單行本として覆刻や影印が行われず、注目を集めることもなかった。ただし當版以降は趙開美本『〔宋板〕傷寒論』と稱する影印本が、民國十二年（一九二三）に上

海の俾鐵樵、民國二十年（一九三二）に上海中醫局書局から出版された。一九五五年には重慶市中醫學會編注の『（新輯宋本）傷寒論』が重慶人民出版社から鉛印刊行されている。いずれも上述した字句の特徴等から、底本は眞の趙開美本でなく、日本の堀川本だったと分かる。とはいえ武昌醫館本の當版は、趙開美系『（宋板）傷寒論』への嗜好を中國で誘引した書だったともいえよう。

#### （4）『類證増注傷寒百問歌』

當版四卷（圖13）も民國元年（一九二二）十二月、他の二書と同時に武昌醫館から刊行された。やはり刊行の事情を示す序跋や校刊札記等が一切なく、「傷寒百問歌」とだけ記す内封の裏に「民國元年十二月／武昌醫館重刊」の木記があるに過ぎない。したがって「重刊」とはあるが、底本も分からない。

本書は宋・錢聞禮の撰で、當版以前の現存版本は以下の三種が知られる。

（一）至大二年（一二三〇）詹子敬序刊本（上海圖書館、

黑龍江中醫學院）

（二）明初重刻（一）本（宮内廳書陵部、臺北故宮博物院）

（三）萬曆四十年（一六一二）喬山堂劉龍田（雷杏泉校）

新鐫本（内閣文庫、中國中醫科學院）

臺北故宮所藏の（二）本（箱號六四）は至大二年刊本と著録されるが、阿部は字樣・雕刀より『經籍訪古志』著録の



圖13 武昌醫館刊本『類證増注傷寒百問歌』（著者藏、北京・中國書店、1980年）

明初重刻本と判断し、これに筆者も従う。當本には室町時代と思われる字音の書き入れ、寺田望南・楊守敬の藏印記があり、『日本訪書志』は著録しないが、『留眞譜初編』に載る書影(圖14)と合致する。<sup>(99)</sup> 本書は上掲のように現存版も書數も少ないので、楊守敬所藏本に基づき武昌醫館から重刊されたのだろう。

武昌醫館本は序・本文各々の毎葉行款が(二)と同じで、全卷にわたり未刻の墨丁がある。臺北故宮本は蟲損部が多いので、それが墨丁に彫られたらしい。ただし武昌醫館本の字樣は(二)本と全く異なり、萬曆風に彫られている。

理由は不明だが、(三)本も参照したためか、守敬が上海に逃れたため刻工に指示できなかったためかも知れない。

## おわりに

本稿では、楊守敬が日本滞在中に小島家の善本古醫籍を多數入手したこと、彼が歸國後に行った出版活動の中には善本古醫籍の校刊もあり、それらの普及を目指したことを縷々述べてきた。一方、彼が狩谷掖齋の考證學と多紀家の醫學を高く評價し、日本滞在中に『經籍訪古志』を媒介に、森立之から文獻書誌學を指導されたことは比較的よく知られている。しかし小島尙質ら小島家の學問に守敬が影響を受けていたことは、これまでほとんど指摘されていない。以下に『日本訪

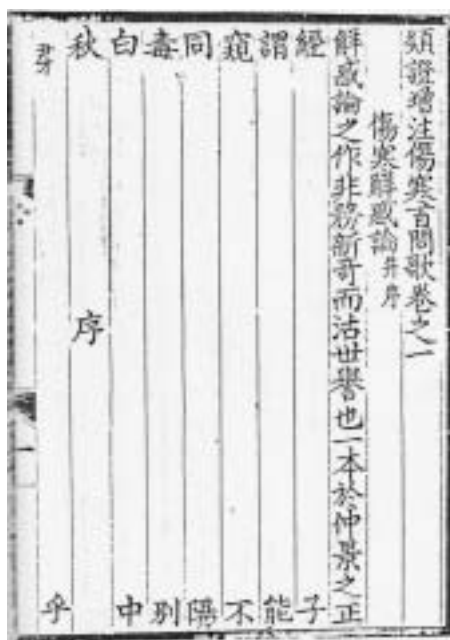


圖 14 明初重刻至大2年本『類證增注傷寒百問歌』書影(『書目五編』所收『留眞譜初編』757頁、臺北・廣文書局、1972年)

書志』に著録の醫書解題で、守敬が言及する日本人の回数を示そう。

尙質・學古・寶素（一五）、小島（二）、春沂〔尙眞〕（二）、森氏・立之（九）、多紀氏（三）、錦小路（二）、淺田惟常（二）  
このように小島家が壓倒的に多いだけではない。第二番の森立之は、多くは彼による古籍の説明を守敬が引用している。  
しかし守敬が小島へ言及する場合は全く違う。『日本訪書志補』の記載を含め、それらを以下に引用する。

小島學古用油素雙鉤、字體精整、想見原本、猶是唐人手筆。（『日本訪書志』明堂）

尙質以初印本硃校于欄外上、……諸書合校者自丁亥訖己亥、首尾十二年始成。其精核可想。又按森立之云、翼方初擬  
附校異二卷而未成、當即以小島校本爲之也。（『日本訪書志』千金翼方）

小島朱藍墨筆校記……可稱精詳。（『日本訪書志』脉經）

小島春沂有補輯本、攷訂極精。（『日本訪書志』肘後備急方）

小島學古據宋本……所引合校……。凡訂正不下數千、事最爲精審、似無遺恨。（『日本訪書志』諸病源候論）

小島學古硃校文字頗多。（『日本訪書志』千金寶要）

小島會粹群籍、精審無遺也。（『日本訪書志』外臺祕要方）

此日本東京醫官小島尙質以……宋槧本校勘、又以巢氏病源……。凡王燾所引書之尙存者、莫不對讀、可謂精審之極。

……讀小島校訂諸書、不能不嘆異域之有人、而後知精斯術者妙悟紳解仍從一字一句做起。（『日本訪書志補』明版外臺祕  
要方）

以上のように小島家が行っていた善本古醫籍の影寫・補輯・校記（校異・校勘）に守敬は驚嘆し、強い刺激を受けていた。  
それゆえ彼が歸國後に行った善本古醫籍の校刊の背景には、第一に小島家校勘學の影響を考えるべきだろう。しかし小島  
家の影響だけでは、なぜ守敬がかくも強靱な意志を持続し、古醫籍まで校刊したかは十分に理解し得ない。

ここで前述したことを再度想起したい。すなわち彼は江戸醫學館がなしえなかった善本古醫籍の校刊を行っていたことである。柯逢時が主だったとはいえ、『大觀本草』の校刊は永く歴史に遺る偉業といっている。守敬は日本で考證醫家の舊藏書を多く入手しただけでなく、江戸醫學館を中心とする大規模な善本古醫籍校刊の實態に觸れ、故國でも同様に善本古醫籍を普及させる必要性を痛感していたのである。それは彼が校刊した『脈經』の序文末尾に「此書出、吾願天下之業斯術者、未能洞徹此旨、慎勿湯裒刀圭」と記す言葉から明瞭に読み取ることができた。

とはいえ、善本を校勘して影刻するには財力も必要である。そこで柯逢時の武昌醫館本出版に協力した。逢時も小島尙質・尙眞が詳細な校異を書き入れた明・醫統正脈全書本『甲乙經』を所有し、「小島所校極精」と評價していた。他方、中國では日清・日露戦争を契機に、日本への注目と警戒が始まり、知識人も自大主義から目覺めた。そうした空氣の中で、守敬と逢時の二人は善本古籍の重要性を強く自覺し、日本でなしえなかった古醫籍校刊を計畫したと思われる。守敬は日本で傳存した多くの善本を持ち歸っており、これに中國所在の善本も併用するなら、より好い校刊が可能だからである。

ただし時代の潮流は彼らに與しなかった。辛亥革命とともに柯逢時は没し、守敬も羅振玉の強い反對を受けながら上京したが、さらなる希望を叶える間もなく没した。だが日本で價值が失われつつあった古典籍を守敬が蒐集し、それを民國政府が購入したため、散佚を免れた書はきわめて多いに違いない。現在それらは再び中國文化圈の需要に應えようとしている。

謝辭・筆者の文獻調査に多大な便宜を賜った臺北故宮博物院圖書文獻館および國家圖書館〔臺北〕の館員諸氏、および拙文に貴重なご意見と資料をいただいた國文學研究資料館・陳捷准教授のご厚意に深謝申し上げます。



\*本稿は「再造與衍義／二〇〇七文獻學國際學術研討會」(二〇〇七年十二月十五・十六日、臺北・國立故宮博物院)での發表稿「楊守敬之醫書校刊與江戸考證醫學家之文獻研究」を大幅に修訂し、和文としたものである。

# 注と文獻

- (1) 楊守敬は『日本訪書志』『書目叢編』所收影印本、臺北・廣文書局、一九六七年)序文第一葉に「守敬……旋交其國醫員森立之、見所著經籍訪古志、遂按錄索之」と記す。
- (2) 原田種成「清客筆話」楊守敬と森立之の筆談、長澤先生古稀記念圖書學論集刊行會編『圖書學論集』四五〇頁、東京・三省堂、一九七三年
- (3) 王鐵策「楊守敬與森立之的《清客筆話》」『文獻』一九九五年第二期一九二～二〇二頁
- (4) 眞柳誠「『傷寒論條辨』解題」『和刻漢籍醫書集成』第一三輯所收、東京・エンタプライズ、一九九一年八月
- (5) 眞柳誠「『傷寒尚論篇』『醫門法律』解題」『和刻漢籍醫書集成』第二五輯所收、東京・エンタプライズ、一九九一年十二月
- (6) 小曾戸洋「幕末考證醫家とその業績」『斯文』一〇六號二六～四四頁、一九九七年三月
- (7) 町泉壽郎「醫學館の軌跡——考證醫學の據點形成をめぐって」『杏雨』七號三五～九二頁、二〇〇四年四月
- (8) 小曾戸洋「考證醫學の人々とその業績」『杏雨』七號九三～一〇七頁、二〇〇四年四月
- (9) 翻古鈔本『醫略抄』『本草和名』(一七九六)、翻印宋版元印『聖濟總錄』(一八一六)、影宋版『本草衍義』(一八三三)、影古鈔本『蝦蟇經』(一八三三)、影元版『千金翼方』(一八二九)、影古鈔本『眞本千金方』(一八三三)、影元版『注解傷寒論』(一八三五)、影宋版『備急千金要方』(一八四九)、翻印李朝木活版『醫方類聚』(一八五二～六一)、影顧從德仿宋版『素問』(一八五五)、影趙開美本『宋板傷寒論』(一八五六)、影古鈔本『醫心方』(一八六〇)の校刊が代表的。なお影宋版『外臺秘要方』の校刊は嘉永六年(一八五三)復刻跋を記した版下(臺北故宮博物院所藏の楊守敬舊藏本(箱號六二、觀字號七二七))まで完成していたが、新たに出現した古鈔本『醫心方』の校刊を優先したため、幕末を迎えて中止となった。
- (10) 亡佚した中國醫書では多紀元胤が朝鮮の『醫方類聚』で『嚴氏濟生續方』を補遺し、多紀元堅らは『醫方類聚』より『五藏論』『食醫心鑒』など計三五種を輯佚。小島尙質は江戸初期寫本の『難經抄』より宋代の『扁鵲八十一難經辨正條例』、月舟壽桂の『史記扁鵲倉公傳』標記及俗解抄より金代の『難經注』を輯佚。森立之は平安時代の『醫心方』より唐代の『醫門方』『孫要方』、唐代の『外臺秘要方』より唐代の『張仲景方十八卷』等を輯佚している。他に作者等を未確認だが、輯佚書の『葛氏方』『范汪方』も彼等による可能性がある。唐以前古本草では輯佚者未詳の『本草拾遺』、小島尙質・尙眞による『新修本草』、小島尙眞・森立之らによる『本草集注』、狩谷掖齋および森立之による『(神農)本草經』などがある。
- (11) 本書には二八五五點の中國醫書について「存」「佚」「未見」の判斷と、諸書から引用の序跋文・傳記および考證が記される。王鐵策「近現代の代表的古醫籍書誌目錄の特徴と問題點」(文部省科研費國際共同研究平成四年度研究成果報告書『和漢韓國際總合目錄の實行可能性調査二・蓄積調査とデータベース(九三/九四)』三七五～五九頁、東京・學術情報センター、一九九四年三月)に詳しい。
- (12) この間の熾烈な存續運動は深川晨堂『漢洋醫學闢爭史 政治闢爭篇』(復刻版、東京・醫聖社、一九八一年)に詳しい。
- (13) 矢數道明『明治一〇年漢方醫學の變遷と將來』一三五頁、東京・春陽堂書店、一九七七年
- (14) これらの事情は以下の兩書に詳しい。陳捷『明治前期中學術交流の



(15) 研究』(東京・汲古書院、二〇〇三年) および王寶平『清代中日學術交流の研究』(東京・汲古書院、二〇〇五年)。

(16) 當時來日した清國人の日記では、以下の書に訪書の様子が詳しい。董康『書舶庸譚』(臺北・世界書局、一九七二年)。

(17) 醫學關聯では以下の報告がある。李鐵君等『醫學交流結善錄』(『中華醫史雜誌』一一卷二號二〇六—二〇七頁、一九八一年)、許立言等『清末中西醫學研究會』(『中國科技史料』二號七七—七九頁、一九八一年)、眞柳誠『清國末期における日本漢方醫學書籍の傳入と變遷』(『矢數道明先生喜壽記念文集』六四三—六六一頁、東京・溫知會、一九八三年)。

(18) 幕末から明治前期に没した代表的な考證醫家の没年を( )内に入れ、以下に示す。小島尙質(一八四八)、多紀元堅・小島尙眞・多紀元時・堀川舟庵(一八五七)、澁江抽齋(一八五八)、伊澤柏軒・多紀元佑(一八六三)、海保漁村(一八六六)、森約之(一八七二)、伊澤榮軒(一八七五)、喜多村直寛・多紀元琰(一八七六)、小島尙綱(一八八〇)、山田業廣(一八八一)、森立之(一八八五)、淺田宗伯(一八九四)、山田業精(一九〇七)。

(19) そうした情況の一端を、楊守敬は『日本訪書志』(臺北・廣文書局影印『書目叢編』本、一九六七年)序文冒頭に「光緒庚申(一八八〇)之夏、守敬應大埔何公使如璋之召赴日本充當隨員、於其書肆頗得舊本」と記す。また羅繼祖も影印本『新修本草』(上海古籍出版社、一九八一年)の跋に、『新修本草』影鈔本十卷(十冊)、先祖羅振玉於光緒辛丑(一九〇一)奉兩江・湖廣兩督命赴日本視察教育時、得之於東京書肆、每卷後有森氏手跋。越七年、又由先内題識於卷端。先祖此次去日、買到許多醫書。其中影寫和舊鈔、大都爲森氏開萬冊府藏本、有此還有森氏題識」と記す。事實、『羅氏振玉藏書目錄』(遼寧圖書館所藏、稻葉君山寫本)には森立之舊藏の一五書が著録され、他にも日本の名家舊藏書や刊本・寫本が多い。

(20) 于乃義『中日兩國人民圖書交流史舉隅』(『文獻』一三輯一〇四—一六六頁、一九八二年九月)

(21) ただし日本所存の古漢籍に最も早期に注目し、積極的に蒐集した人物は方功惠(一八二九—九七?)だろう。彼は廣州の通判だった時、日本から傳來する漢籍に氣づき、光緒初期に日本へ人を派遣して善本を蒐集したとされる。その藏書目錄には毛利家の「佐伯文庫」舊藏書等が見え、方功惠の藏書を一部傳える北京大學圖書館・中國國家圖書館にも「佐伯文庫」本がある。一方、佐伯文庫本は江戸時代ほぼ半数が幕府に献上されて現在の内閣文庫と宮内廳書陵部に大多數が傳えられるが、非献上書が明治維新後も大分縣と毛利家に残っていた。當時の書籍館(現在の國會圖書館)は、大分縣が明治四年(一八七二)に作成した佐伯文庫目錄に基づき約二四種を收藏し、縣下と毛利家に残された佐伯文庫本の多くは賣卻處分された。その多くを購入したのが方功惠だった。以上は大塚秀高『佐伯文庫舊藏暨現存書目錄』(漢籍之部)、『方功惠碧琳瑯館舊藏書總合目錄』(第二稿)、『科學研究費特定領域研究「江戸時代における漢籍の流轉—佐伯文庫を例に」二〇〇四年度實績報告書Ⅰ・Ⅱ』、埼玉大學・大塚秀高、二〇〇五年三月)による。他方、陳捷『明治前期日中學術交流の研究』二二〇—二二五頁(東京・汲古書院、二〇〇三)および王寶平『清代中日學術交流の研究』四一〇頁(東京・汲古書院、二〇〇五)によると、三木佐助(一八五二—一九二五)は神戸在住の廣東人華僑の麥梅生と合辦で、一八七二—七九年まで廣東にて日本からの輸入書を販賣し、『外臺祕方』『東醫寶鑑』(享保九年官版)『醫宗金鑑』の和刻版本も賣った、と三木の回想録『玉淵叢話』(一九〇一)に記される。この廣東という場所、一八七二—七九年という時期は方功惠の蒐書と一致するので、功惠は麥梅生に托して三木佐助の協力で「佐伯文庫」舊藏書などを一八七九年以前に入手した可能性も考えられる。

(22) 楊守敬『日本訪書志』日本訪書志緣起、『書目叢編』所收影印本、臺

- (22) 北・廣文書局、一九六七年  
當題識は王重民輯『日本訪書志補』（中華圖書館協會第三種、一九三〇年）一九葉に轉錄される。
- (23) 當題識は王重民輯『日本訪書志補』（中華圖書館協會第三種、一九三〇年）二四～二五葉に轉錄される。
- (24) 趙飛鵬『觀海堂藏書研究』七〇頁、臺北・漢美圖書有限公司、一九九一年
- (25) 森林太郎『鷗外選集』第六卷三四五頁、東京・巖波書店、一九七九年  
京大富士川文庫所藏の江戸前期寫本『醫方小兒論』一冊（イ二三ノ一八三六八五）は、卷首に「小兒門 小嶋圓齋流」とあり、初代圓齋との關聯が考えられる。
- (27) 町泉壽郎「日本の名醫五〇〇傑（三三）」『活』四四卷八號一一頁、二〇〇二年八月
- (28) 眞柳誠「臺灣訪書志Ⅰ 故宮博物院所藏の醫藥古典籍（一）～（三七）」『漢方の臨牀』四九卷一號一四一～一六一頁（二〇〇二年一月）～五四卷二號三五七～三六四頁（二〇〇七年二月）に連載。さらに當報告を修補して以下のURLでウェブ公開している。 <http://www.hum.ibaraki.ac.jp/mayanagi/paper/01/TaiwanKokyu.html>
- (29) 同系書に『對經篇續錄』一冊と著錄される書が中國國家圖書館にあり、對經篇・黃帝內經太素攷・對經篇續錄（淺田宗伯編）からなる。これは宗伯が一八四二年に尙質本を轉寫し、同年八月に續錄を加え、それを近藤顯が一八四九年に轉寫して同年に尙眞が識語を記している。當本からの再轉寫本は臺北故宮にあり、『黃帝內經太素考異』と著錄されている。また『太素對經篇』一卷一冊が杏雨書屋にあり、黃帝內經太素攷・對經篇・全元起本復原目次からなる。當本は一八四〇年の瀝江抽齋轉寫、一八四四年の清川玄道轉寫、一八五七年の森立之轉寫を重ね、森本を淺田宗伯が入手して書き入れし、それを一八八三年に服部政世が轉寫したものである。抽齋の轉寫識語に「右對經篇中大素一卷、
- (30) 實素先生所述。天保十一年（一八四〇）二月廿八日、書寫了。善」とあることから、『對經篇』は基本的に尙質の作で、一八四〇年以前の成立と分かる。
- (31) 當目錄は杏雨書屋にもあるが、國會圖書館藏森立之寫本の轉寫本である。
- (32) 陳捷『明治前期日中學術交流の研究』四六六～四七五頁、東京・汲古書院、二〇〇三年
- (33) 當目錄は杏雨書屋にもあるが、國會圖書館藏森約之寫本の轉寫本である。
- (34) 『國書總目錄』等は尙綱の著として『醫療雜譚（醫事四十四問）』一冊（京大富士川文庫、慶大富士川文庫、杏雨書屋、植考書屋）を記す。しかし當書は文政間に武田叔安が質問し、多紀元堅・小島尙質・曾槃・奈須玄虫・喜多村直寛らが答えた各人の手書からなり、その臨寫本を森立之が所藏していた。これを尙綱が一八六〇年に筆寫した本が杏雨書屋にあり、尙綱筆寫本から更に轉寫本が作られたため、尙綱の著とされたらしい。
- (35) 上掲文獻（6）（7）（8）および眞柳誠「幕末考證學派の巨峰・椿庭山田業廣」『山田業廣選集』六二一～六八七頁所收、東京・名著出版）・眞柳誠「喜多村直寛による『醫方類聚』の復刊」（『漢方の臨牀』三九卷一二號一四八八～九〇頁）ほかによる。
- 東京都立中央圖書館に文館詞林盛事（附武后制字攷補・文館詞林見存目錄・補攷、特八四一四六）・讀書敏求記（〇二五／IW／二七）・雲仙雜記（九二三／IW／二二）・赤雅（二九二／IW／一六八）・雲閣史（〇四九／IW／三七）・全唐詩話（九二二／IW／一九七）、内閣文庫に春秋別典（二八六／八〇）・楚辭（附辯證・後語、四三／一）、宮内廳書陵部に新板増廣附音釋文胡曾詩註（五五六函一四八號）・王狀元集百家註分類東坡先生詩（四〇四函六二號）、慶應大學斯道文庫に論語義疏（〇九一／ト五／七）がある。

- (36) 例えば溫知堂矢數文庫（東京）の小野隆庵『古方選』不分卷一冊（一七六〇年序、一七七二年刊）には「小島氏／圖書記」の蔵印記があり、修琴堂大塚文庫（東京）には小島尙質寫の多紀元堅『傷寒論述義』がある。
  - (37) 小島舊藏書では朝鮮（盧重禮）著『胎產要錄』二卷一冊（日本（江戸後期）鈔本、箱號四六九、觀字號九四五）の一書が臺北故宮にある。森潤三郎『多紀氏の事蹟』二七六頁、京都・思文閣出版、一九八五年眞柳誠・王鐵策『日本内閣文庫所蔵の中國散佚古醫籍』『中華醫史雜誌』二八卷二期六五〜七一頁、一九九八年四月
  - (39) 吳天任『楊惺吾先生年譜』三〇頁、臺北・藝文印書館、一九七四年林述齋原編・高柳光壽ほか新訂『新訂寛政重修諸家譜』一九卷二三三頁、東京・續群書類從完成會、一九六四年二月〜一九六七年八月
  - (40) 幕臣に支給される俵は三斗五升入だったので一五〇俵は玄米五二・五石、三人扶持は玄米五四・七五石（三人×〇・〇〇五〔石／日〕×三五五日）にあたる。すると尙綱の俸祿一五〇俵と三人扶持は、玄米一〇七・二五石になる。一方、磯田道史（武士の家計簿）五四頁、東京・新潮社、二〇〇三年）によれば、當時の大工見習いは約二〇日／三〇日間休まず働き、ようやく玄米一石を手にした。したがって玄米一〇七・二五石は、當時の大工見習い二一四五／三二六日分の労働にあたる。現代の大工日當は約八千〜一万二千圓であるから、當時の大工見習い二一四五／三二六日分の労働にあたる尙綱の年収は、現代の二千萬〜三千萬圓にのぼったと考えられる。
  - (43) 森林太郎『鵬外選集』第六卷三六〇頁、東京・巖波書店、一九七九年楊守敬『日本訪書志』卷一〇第一葉、『書目叢編』所收影印本、臺北・廣文書局、一九六七年
  - (45) 石田肇『楊守敬と森立之』『書論』二六號一六三〜一七三頁、一九九〇年
  - (46) 大森徹『明治初期の財政構造改革・累積債務處理とその影響』『金融研
- (47) 究』二〇卷三號二五〜一五八頁、二〇〇一年九月  
楊守敬の墨筆で（江戸後期）鈔本『胎產要錄』一冊（箱號四六九、觀字號九四五）に「二〇〇〇」の刻、江戸刊の『少小嬰孺方』一冊（箱號三八九、觀字號九二九）に「二兩」、明嘉靖刊の『新刊勿聽子』俗解脈訣大全』二冊（箱號五六七、觀字號六七二）に「二匁」、明初刊の『新刊廣成先生玉函經解』一冊（箱號六二、觀字號なし）に「三兩」（江戸後期）鈔の『玄門脈訣內照圖』一冊（箱號五〇三、觀字號六七三）に「二匁」、永正五年鈔の『五藏次第圖』一冊（箱號一四六八、觀字號なし）に「二兩」、嘉永四年鈔の『蘇沈內翰良方』二冊（箱號三八九、觀字號七三九）に「二兩」とある。
  - (48) 同圖書館所蔵古醫籍については、拙著『臺灣訪書志Ⅱ 國家圖書館（臺北）所蔵の醫藥古典籍』を『漢方の臨牀』誌に五四卷四號（二〇〇七年四月）から連載を開始している。  
長澤規矩也『經籍訪古志』考『長澤規矩也著作集』第二卷一六六〜二三四頁、東京・汲古書院、一九八二年
  - (49) 陳捷『明治前期日中學術交流の研究』五四〇〜五四二頁、東京・汲古書院、二〇〇三年
  - (50) 森林太郎『鵬外選集』第六卷一四五頁、東京・巖波書店、一九七九年矢數道明『近世漢方醫學史』三六五頁、東京・名著出版、一九八二年小島菅治監修『幕末／明治 中國見聞録集成』第三〇卷所收、東京・ゆまに書房、一九九七年
  - (51) 眞柳誠『岸田吟香の廣告錦繪』『漢方の臨牀』五四卷四號五五八〜五六〇頁、二〇〇七年四月
  - (52) 張玉範『李盛鐸及其藏書』、李盛鐸『木犀軒藏書題記及書錄』所收四二六頁、北京大學出版社、一九八五年
  - (53) 眞柳誠・陳捷『岸田吟香が中國で販賣した日本關聯の古醫書』『日本醫學雜誌』四二卷二號一六四〜一六五頁、一九九六年六月
  - (54) 杉浦正『岸田吟香』資料から見たその一生』二九四頁、東京・汲古書

- 院、一九九六年
- (58) 王寶平『清代中日學術交流の研究』八一～一四五頁、東京・汲古書院、二〇〇五年
- (59) 吳天任『楊惺吾先生年譜』四九～五〇頁、臺北・藝文印書館、一九七四年
- (60) 吳天任『楊惺吾先生年譜』五〇～一六九頁（臺北・藝文印書館、一九七四年）および陳捷『明治前期日中學術交流の研究』五三一～五七二頁（東京・汲古書院、二〇〇三年）。
- (61) 趙飛鵬『觀海堂藏書研究』七八・一〇〇～一〇一頁、臺北・漢美圖書有限公司、一九九一年
- (62) 趙飛鵬『觀海堂藏書研究』七七頁、臺北・漢美圖書有限公司、一九九一年
- (63) 吳天任『楊惺吾先生年譜』所收「楊惺吾先生著述及輯刻圖書表」一～一二頁、臺北・藝文印書館、一九七四年
- (64) 趙飛鵬『觀海堂藏書研究』四五～六三頁、臺北・漢美圖書有限公司、一九九一年
- (65) 陳捷『明治前期日中學術交流の研究』五三二～五三六頁、東京・汲古書院、二〇〇三年
- (66) 楊守敬編印『聿修堂醫學叢書』（上海中醫書局鉛印、一九三五）による。陳捷「清客筆話」、謝承仁主編『楊守敬集』第一三冊五三八頁、武漢・湖北人民出版社、一九九七年
- (68) 明治十五年はまだ維新後最大のインフレーションの最中で、圓の價值は最低レベルにあった。一つの推計によると、明治七年まで一圓は現在の一萬圓程度に換算されるが、明治十五年には五五〇〇圓までに下がる。すると守敬が購入したという四〇〇圓の價格は、今の日本なら二二〇萬圓程度だろう。全七〇卷の版本なので一巻あたり約三萬圓となり、相當な買い得だったように思われる。
- (69) 陳捷「清客筆話」、謝承仁主編『楊守敬集』第一三冊五二七頁、武漢・湖北人民出版社、一九九七年
- (70) 民國時代の單行本には以下の諸書がある。一九二〇年成都福昌公司鉛印『傷寒廣要』、一九二二年上海中華書局鉛印『救急選方』、一九二八年紹興六也堂鉛印『傷寒廣要』、一九三二年上海六也堂鉛印『傷寒論述義』、一九三二年上海文明書局鉛印『救急選方』、一九三四年上海中醫書局および上海千頃堂書局鉛印『藥治通義』、一九三八年上海文明書局再版『救急選方』等。新中國以降も人民衛生出版社より上掲各書が幾度も鉛印出版されている。
- (71) 注釋書等には以下の諸書がある。一九二二年廖平注、成都存古書局六譯館醫學叢書『藥治通義輯要』『脈學輯要評』。一九三一年何廉臣注、上海六也堂書局『新增傷寒廣要』。一九四八年上海章巨膺醫室、一九四九年上海新中醫學出版社、一九五四年上海千頃堂藥庵醫學叢書『傷寒輯義按』。
- (72) 當現象については以下の拙報を參照されたい。眞柳誠「清國末期における日本漢方醫學書籍の傳入と變遷」、『矢數道明先生喜壽記念文集』六四三～六六一頁、溫知會、一九八三年）、眞柳誠「中國に於いて出版された日本漢方關係書籍の年代別目録（一）」、『漢方の臨牀』三〇卷九號四七～五一頁、一九八三年九月）、眞柳誠「中國に於いて出版された日本漢方關係書籍の年代別目録（二）」、『漢方の臨牀』三〇卷一二號三二～四一頁、一九八三年十月）、蕭衍初・眞柳誠「中國新刊の日本關聯古醫籍——最近十年の復刻書より」、『漢方の臨牀』三九卷一一號一四三～一四四頁、一九九二年十一月）、眞柳誠「近代中國傳統醫學と日本——民國時代における日本醫書の影響」、『漢方の臨牀』四六卷一二號一九二八～一九四四頁、一九九九年十二月）。
- (73) 筆者は守敬本『脈經』を長春中醫藥大學圖書館と中國國家圖書館分館で調査した。
- (74) 附錄『影宋千金方攷異』一卷の末葉に、總閱として多紀元堅・多紀元昕・小島尚質、校勘として奈須信德・森富壁・伊澤信重・堀川濟・森

立之の名が記される。

- (75) 本書末に文政己丑（一八二九）年の杉本良「千金翼方後序」があり、本書複製の功勞者は船橋經中・野間任夫・小島學古（尙質）という。王重民『中國善本書提要』補遺一〇〇／一〇四頁、上海古籍出版社、一九八三年
- (76) 陳捷『明治前期日中學術交流の研究』五二八・五六七頁、東京・汲古書院、二〇〇三年
- (77) 陳捷「楊守敬と羅振玉の交友について——楊守敬の羅振玉宛書簡を通して」『書論』三三號一二六／一三八頁、二〇〇一年三月
- (78) 薛清錄『全國中醫圖書聯合目錄』一〇六頁、北京・中醫古籍出版社、一九九一年
- (79) 朱祥麟「柯逢時與武昌醫館」『中華醫史雜誌』三三卷一期一四頁、二〇〇二年一月
- (80) 陳捷『明治前期日中學術交流の研究』五三四頁、東京・汲古書院、二〇〇三年
- (81) 阿部隆一『増訂中國訪書志』五二二頁、東京・汲古書院、一九八三年
- (82) 渡邊幸三『本草書の研究』六六頁、大阪・武田科學振興財團、一九八八年
- (83) 岡西爲人『本草概説』一二六頁、大阪・創元社、一九七七年
- (84) 劉禺生「記楊守敬先生」『世載堂雜憶』八四／八五頁、北京・中華書局、一九六〇年
- (85) 木村康一・吉崎正雄編輯『復刻本・經史證類大觀本草』、東京・廣川書店、一九七〇年
- (86) 吳家鏡譯述『經史證類大觀本草』、臺南・正言出版社、一九七七年
- (87) 森立之『經籍訪古志』、大塚敬節・矢數道明編『近世漢方醫學書集成』五三所收三九六頁、東京・名著出版、一九八一年
- (88) 阿部隆一『増訂中國訪書志』三〇九／三一〇頁、東京・汲古書院、一九八三年
- (89) 王重民輯『日本訪書志補』一八葉、中華圖書館協會第三種、一九三〇年
- (90) 眞柳誠「仲景全書」解題『和刻漢籍醫書集成』第一六輯所收、東京・エンタプライズ、一九九二年三月
- (91) 楊守敬『留眞譜初編』（書目五編、影印本）六四三頁、臺北・廣文書局、一九七二年
- (92) 楊守敬『日本訪書志』（書目叢編、影印本）六〇三／六一五頁、臺北・廣文書局、一九六七年
- (93) 小曾戸洋「楊守敬『日本訪書志』『留眞譜』所載「影北宋本傷寒論」の檢證——附説・現行影趙開美本傷寒論懷疑」『傷寒論醫學の繼承と發展——仲景學說シンポジウム記録』四八／五二頁、市川・東洋學術出版社、一九八三年
- (94) 眞柳誠「清國末期における日本漢方醫學書籍の傳入と變遷」『矢數道明先生喜壽記念文集』六四三／六六一頁、溫知會、一九八三年
- (95) 眞柳誠「臺灣訪書志Ⅱ 國家圖書館（臺北）所藏の醫藥古典籍（七）『漢方の臨牀』五四卷一〇號一六六一／一六六六頁、二〇〇七年十月
- (96) 眞柳誠「趙開美の『仲景全書』と『宋板傷寒論』」『日本醫史學雜誌』五二卷一號一四四／一四五頁、二〇〇六年三月
- (97) 岡西爲人『宋以前醫籍考』三五五頁所引、臺北・古亭書屋、一九六九年
- (98) 阿部隆一『増訂中國訪書志』三〇一頁、東京・汲古書院、一九八三年
- (99) 楊守敬『留眞譜初編』（書目五編、影印本）七五七頁、臺北・廣文書局、一九七二年
- (100) 本書は北京の中國中醫科學院圖書館の所藏で、收載經緯は未詳。書末に柯逢時自筆で「是書係小島原校本、屬劉君殿臣、以奈須恒德本補入。小島所校極精、恒德亦間可采。等他日再獲善本、當復卒業。光緒己酉（一九〇九）長至日、柯逢時記」の識語が記される。
- (101) 陳捷「楊守敬と羅振玉の交友について——楊守敬の羅振玉宛書簡を通して」『書論』三三號一二六／一三八頁、二〇〇一年三月
- (102)